長 沖 古 墳 群 XVII

－梅原地区Ａ地点の調査－

２０１７

本 庄 市 教 育 委 員 会

序

埼玉県の北部に位置する本庄市には、２万年前に遡る石器が発見された浅見山Ⅰ遺跡をはじめ、県内最古級の古墳として著名な鷲山古墳、中世に享徳の乱の舞台となった五十子陣跡など、歴史上重要な遺跡が数多く所在しています。

市内の児玉町高柳から長沖にかけて分布する長沖古墳群も、総数200基を超える埼玉県内最大規模の古墳群としてよく知られています。また、これまでの調査で、縄文時代の集落跡が、古墳群と重なるように広がっていることも判明しています。

本書に報告する梅原地区Ａ地点の調査では、古墳７基のほかに、縄文時代の竪穴住居跡や土坑が検出されましたが、この中では特に前方後円墳である137号墳と、縄文時代草創期に遡る土坑の調査成果が注目されるでしょう。137号墳では、円筒埴輪が、古墳を築造した際に据え置かれたそのままの状態で検出され、古墳上での埴輪の使われ方を復原するうえで、貴重な資料を得ることができました。また、縄文時代草創期の遺構は、発見されることが非常に珍しく、このたび確認された土坑も、本庄市を含む児玉地域では、初めての検出例となりました。

今後は、本書が学術研究の資料としてはもとより、郷土の歴史を理解するための一助となるよう、幅広くご活用いただければ幸甚に存じます。

末筆ながら、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた関係諸機関、直接作業の労にあたられた地元住民の皆様に心からの御礼を申し上げます。

平成２９年３月

本庄市教育委員会
教育長　勝山　勉

例　　言

1．本書は、埼玉県本庄市児玉町金谷字梅原に所在する長沖古墳群梅原地区A地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、旧児玉町の町道改良舗装工事に伴い、記録保存を目的として、旧児玉町教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査期間は以下のとおりである。

　自　昭和59年10月20日　　至　平成60年1月31日

4．発掘調査面積は町道建設予定地にかかる1,750㎡である。

5．発掘調査は旧児玉町教育委員会鈴木徳雄および恋河内昭彦が担当した。

6．整理調査期間は以下のとおりである。

　自　平成28月4月1日　　至　平成29年1月21日

7．整理調査は本庄市教育委員会文化財保護課太田博之が担当した。

8．本書の執筆は、第Ⅲ章3および第Ⅳ章1を本庄市教育委員会文化財保護課松本完が、その他を太田が担当した。

9．本書の編集は太田が担当した。

10．本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。

11．整理調査から報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

池田匡彦　井上裕一　大谷　徹　加部二生　金子彰男　車崎正彦　昆　彰生
佐々木幹雄　坂本和俊　志村　哲　中沢良一　日高　慎　増田一裕　丸山　修
山崎　武

12. 本報告の整理調査および報告書編集・刊行に関係する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教　　育　　長　勝山　勉

教育委員会事務局

事　務　局　長　稲田幸也

文化財保護課

課　　長　杉原　初

課長補佐兼

埋蔵文化財係長　太田博之

主　　幹　恋河内昭彦

埋蔵文化財係

主　　査　松本　完

主　　査　徳山寿樹

主　　任　的野善行

臨　時　職　員　中嶋淳子

凡　　例

1．本書所収の遺跡全体図におけるＸ・Ｙ座標値は、世界測地系に基づく。各遺構における方位針は、座標北を示す。

2．本書掲載の図面のうち、遺構図の縮尺は、各図に明示している。
遺物実測図の縮尺は、1/4を基本としているが、縄文土器の一部は1/2としている。

3．遺構断面図の水準数値は海抜を示す。単位はｍである。

4．遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示す。

5．挿図中で用いた遺構の記号は、以下の通りである。
ＳＴ－古墳　ＳＩ－住居　ＳＫ－土坑　ＳＤ－溝

6．遺物観察表に記した記号は、以下の通りである。
Ａ－法量（単位はcm）　Ｂ－成形　Ｃ－整形・調整　Ｄ－胎土、材質、含有物
Ｅ－色調　Ｆ－残存度　Ｇ－備考

7．本文および土層注記において取り上げた火山噴出物については、以下の通りに略記している。
As-A　：浅間Ａ軽石［天明３（1783）年］
As-B　：浅間Ｂ軽石［天仁元（1108）年］
Hr-FA ：榛名二ツ岳渋川テフラ［５世紀末葉］

8．本書掲載の地形図は、国土地理院発行1/50,000「本庄」、遺跡の位置図は、本庄市都市計画図1/2,500に加筆して用いた。

9．本書の参考文献は巻末に一括して記載した。

目　　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　遺跡の環境……1
　1　地理的環境……1
　2　歴史的環境……2

Ⅱ　長沖古墳群の概要……4

Ⅲ　調査の成果……9
　1　調査の概要……9
　2　古墳……10
　3　住居……27
　4　土坑……35
　5　溝……40
　6　道路状遺構……45

Ⅳ　結　語……47
　1　1・2号土坑出土遺物について……47
　2　長沖古墳群の構成……47

参考文献
写真

挿　図　目　次

第１図　埼玉県の地形……１
第２図　長沖古墳群古墳分布図……５
第３図　遺構位置図……６
第４図　遺構全体図……７・８
第５図　113 号墳平面図・断面図……９
第６図　114 号墳平面図・断面図……10
第７図　137 号墳平面図（1）……11
第８図　137 号墳平面図（2）……12
第９図　137 号墳断面図……13
第10図　137 号墳出土遺物状況図……14
第11図　137 号墳出土埴輪（1）……15
第12図　137 号墳出土埴輪（2）……16
第13図　137 号墳出土埴輪（3）……17
第14図　137 号墳出土埴輪（4）……18
第15図　137 号墳出土埴輪（5）……20
第16図　138 号墳平面図・断面図……21
第17図　161 号墳平面図・断面図……23
第18図　162 号墳平面図・断面図……24
第19図　163 号墳平面図・断面図……25
第20図　調査区出土埴輪……26
第21図　１号住居平面図・断面図……27
第22図　１号住居炉平面図……28
第23図　１号住居出土遺物状況図……28
第24図　１号住居出土遺物（1）……29
第25図　１号住居出土遺物（2）……30
第26図　１号住居出土遺物（3）……31
第27図　２号住居平面図・断面図……33
第28図　２号住居出土土器……33
第29図　調査区出土土器……34
第30図　１・２号土坑平面図・断面図……35
第31図　１・２号土坑出土土器……35
第32図　３～24号土坑平面図・断面図……36
第33図　溝平面図・断面図(1)……38
第34図　溝平面図・断面図(2)……39
第35図　溝平面図・断面図(3)……40
第36図　溝平面図・断面図(4)……41
第37図　溝平面図・断面図(5)……42
第38図　溝平面図・断面図(6)……43
第39図　溝平面図・断面図(7)……44
第40図　道路状遺構平面図・断面図……46

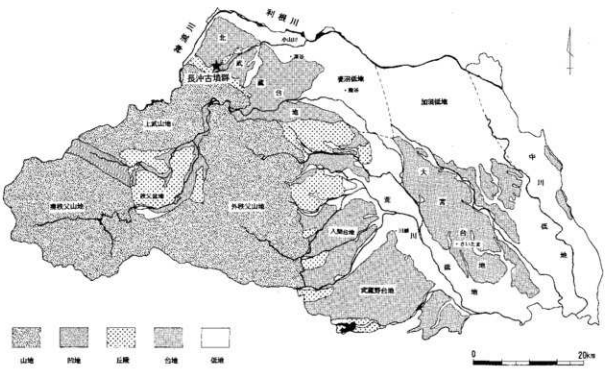
写 真 目 次

写真１　113 号墳［北から］
137 号墳［西から］
137 号墳［北西から］
137 号墳［北西から］
137 号墳円筒埴輪列出土状況［北西から］
137 号墳円筒埴輪列出土状況［北から］
137 号墳円筒埴輪（№1 ）出土状況
137 号墳円筒埴輪（№2 ）出土状況
写真2　137 号墳円筒埴輪（№3 ）出土状況
137 号墳円筒埴輪（№4 ）出土状況
137 号墳円筒埴輪（№5 ）出土状況
137 号墳円筒埴輪（№6 ）出土状況
137 号墳円筒埴輪（№7 ）出土状況
161 号墳・８号溝［北から］
162 号墳［南東から］
162 号墳・22号溝［西から］
写真３　１号住居［北から］
写真３　１号住居炉出土状況
１号住居遺物出土状況
１号住居遺物出土状況
１号住居遺物出土状況
１・２号土坑・道路状遺構［北東から］
８・９号土坑・８号溝［南西から］
１・２号溝［北東から］
写真４　137 号墳出土埴輪(1)
写真５　137 号墳出土埴輪(2)
写真６　137 号墳出土埴輪(3)
写真７　137 号墳出土埴輪(4)
調査区出土埴輪
写真８　１号住居出土土器(1)
写真９　１号住居出土土器(2)
写真10　１号住居出土土器(3)
２号住居出土土器
調査区出土土器

第Ⅰ章　遺跡の環境

1　地理的環境

本庄市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地、さらにその南方に連なる山地とに大別される。低地には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。台地は身馴川（小山川）扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川（小山川）扇状地は西側を第三紀の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、小山川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県藤岡市浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本庄市鵜森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女堀川、男堀川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。また、山地は上武山地の北縁にあたり、奥秩父山地に比べ浸食が進み、谷が広く、起伏の少ない地形を特徴としている。本書に報告する長沖古墳群は、本庄市児玉町高柳から同長沖にかけての丘陵端部とそこから連続する台地上に立地している。



第１図　埼玉県の地形

2　歴史的環境

今日までの調査で、長沖古墳群内には、縄文前期～中期および古墳時代前期の竪穴住居も存在することが明らかになっている。実際、本書に報告する梅原地区においても、縄文時代中期の住居跡が検出されているが、縄文前・中期、古墳時代前期ともに集落としての総体的な状況は判明していない。そこで本節では、児玉地域における古墳の出現から終焉までを通覧し、周辺古墳との関係を見ることで、長沖古墳群の歴史的環境を確認しておきたい。なお、本節でいう児玉地域とは本庄・美里・上里・神川４市町の範囲を指す。また、文章中では、必要に応じ東に隣接する深谷市城所在の古墳についても言及する。

本庄市鷲山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である（坂本1986）。女堀川中流域の丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形に広がる前方部の平面形や手焙形土器の出土から、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は、口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部のみに穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階の資料とする理解も可能であり、築造は前方後円墳集成畿内編年３期（以下、集成○期と略す）に下るものと考えられる。

大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山１号墳は円墳と考えられてきたが、本庄市教育委員会による確認調査の結果、全長70mを超える埼玉県内では最大規模の前方後円墳であることが明らかとなった。口縁部上段に葺石を備え，周堀をめぐらせている。埴輪はもたず、出土した土師器の型式から集成４期の築造が考えられる。美里町長坂聖天塚古墳（径50m）は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計６基の埋葬施設から稜雲文方格規矩鏡、獣首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む刀子形石製の形態などから、古墳時代前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長胴化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長坂聖天塚古墳に次ぐ時期の築造とされる。北堀前山１号墳に近接して所在する北堀前山２号墳は、従来、径28mの円墳とされてきたが、本庄市教育委員会による第２・３次調査の結果、一辺30m前後の方墳となることが確認された。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか、周堀から土師器坩が検出されている。

集成６期を前後する時期には、生野山丘陵の本庄市生野山将軍塚古墳（径60m）、同金鑽神社古墳（径68m）、女堀川流域の本庄市公卿塚古墳（径60m）などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山将軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葺石の存在も確認されている。また、生野山将軍塚・金鑽神社・公卿塚の３古墳では、埴輪の製作に格子タタキ技法を用いていることが知られている。格子タタキ技法による埴輪については、これまでにも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来工人の関与があった可能性は高い。

これら３古墳に比べてやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳（径40m）、小山川上流域の本庄市長沖157 号墳（径32m）では有黒斑の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組

成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている。

集成７・８期になると、前段階のような直径60ｍクラスの大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳（径34ｍ）、生野山丘陵の生野山９号墳（径42ｍ）など30～40ｍ台の円墳となる。なお、生野山９号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳（径12ｍ）、同77号墳（径14ｍ）、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校１号墳（径19ｍ）、同２号墳（径12ｍ）、同三杢山２号墳（径22ｍ）などいずれも10～20ｍ前半台の小型円墳で、円筒埴輪の外面二次調整にＢ種ヨコハケを用いる二条突帯の円筒埴輪を樹立し、TK208型式の須恵器などを伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、深谷市白山古墳群などはやや遅れて、外面二次調整を欠く二条突帯の円筒埴輪とTK23・47型式の須恵器などを出土する群集墳である。神川町青柳古墳群では、集成９期前半に、横穴式石室を導入することが知られている。

集成10期に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

集成９期以降には、首長墓として前方後円墳が再び採用されるようになる。小山川上流域では本庄市長沖古墳群の長沖25号墳（40ｍ）、同31号墳（51ｍ）、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳（60ｍ）、同生野山古墳群の生野山銚子塚古墳（58ｍ）、生野山16号墳（58ｍ）、小山川中流の深谷市四十塚古墳群の寅稲荷古墳（52ｍ）、本庄市塚合古墳群の大林二子山古墳（規模未詳）、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳（規模未詳）、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩銚子塚古墳（46ｍ）などが知られる。

終末期には、前方後円墳に代わる首長墓として、深谷市前原愛宕山古墳（辺37ｍ）のような大型の方墳や旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳（径38ｍ）のような大型の円墳が採用されている。また各地の群集墳も後期後半段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、児玉地域で４箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。児玉地域では、鴻巣市生出塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵端部に位置し、埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、焼土層の落ち込みとして12基を確認している。本庄市八幡山埴輪窯跡は、かつて県立児玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した。その後、1961年に高等学校の校地拡張工事に伴い、２基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している。本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際し、焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている。本庄市宥勝寺裏埴輪窯跡は近年の確認調査で、５基以上の窯跡が比較的良好な状態で遺存していることが確認された。遺物は靫形埴輪４点、翳形埴輪１点をはじめ、家、大刀、鞆、馬、人物など多種の形象埴輪を出土している。操業時期は６世紀後半段階と推定される。

第Ⅱ章　長沖古墳群の概要

長沖古墳群は古墳時代中期から終末期にかけて形成された埼玉県内最大規模の群集墳である。旧児玉町の市街地南方にあって、北東方向に流下する小山川左岸の丘陵部から台地面にかけて立地し、分布範囲は、東西1,700ｍ、南北500ｍに及ぶ。古墳群北方の丘陵上に、単独で存在している157号墳を除き、平成29年１月現在までに前方後円墳５、帆立貝形古墳１、円墳202、計208基の古墳が確認されている。以下、「前方後円墳集成畿内編年」に拠り、時期を追って古墳群の変遷を確認する。

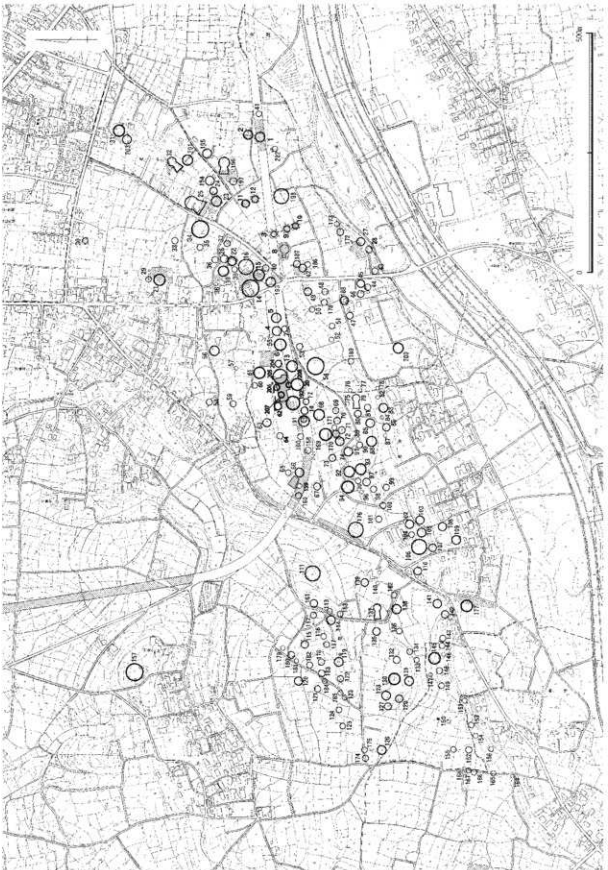
調査によって築造時期の判明している古墳の中では、14号墳が最も古い（恵河内2012）。直径28ｍの円墳で、外面二次調整Ｂ種ヨコハケ・無黒斑の円筒埴輪、家形と思われる形象埴輪片が出土し、築造時期は「前方後円墳集成畿内編年」の７期（以下「集成○期と略記する」）である。ただし、東隣に所在する15号墳の周溝からは、野焼きによると思われる突出度の高い三条突帯の円筒埴輪が出土している。15号墳は直径19ｍの円墳で、二条突帯の円筒埴輪をもつ集成８期の古墳であることから、付近に集成６期以前の大型古墳が存在したと考えられる（菅谷ほか1980）。また、14・15号墳の北東約150ｍの地点に所在した34号墳でも、古相の円筒埴輪片が検出されている（菅谷1984）。外面調整は一次タテハケのみで突出度の高い突帯をもち、外面に赤彩が見られ、野焼きによると思われる資料であることから、同墳の築造時期を集成６期以前とする見解が示されている（坂本2008）。このほかに直径31ｍの円墳である54号墳も、７期以前の築造とする意見がある（坂本2008）。

つづく集成８期には、15号墳、172号墳、173号墳など、直径20ｍ以下の小型円墳の造営が見られる。いずれも墳丘を失っているが、規模の大きな古墳には埴輪が伴う。「古式群集墳」や「初期群集墳」と呼びうるような密集形態の小型円墳群は、いまのところ確認されていないが、集成８期を中心とした時期の簡易な竪穴系埋葬施設を備えた小型円墳は、墳丘を失っている場合がほとんどと思われ、今後の調査で検出例を増す可能性が高い。

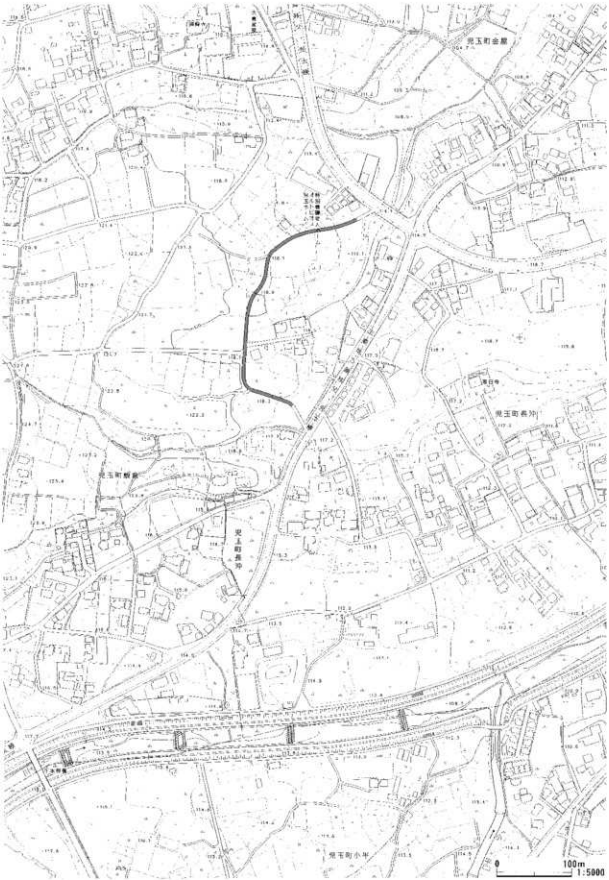
横穴式石室は集成９期に導入されているらしい。導入の当初には、先ず短冊形無袖式横穴式石室が採用され、集成10期に入って両袖式石室が現れる。その後、集成10期のうちに模様積みによる胴張型石室へと移行するようである。

群内に所在する６基の前方後円墳・帆立貝形古墳のなかで、築造時期が判明するものは、いずれも集成９・10期に帰属する。137号墳は第一段の幅が広い二条突帯の円筒埴輪をもち、集成10期の築造が確実視される。32号墳では、鞍などの器財埴輪とともに、二条および三条突帯の円筒埴輪が出土している。二条突帯の円筒埴輪は第一段幅が伸長しておらず、築造時期は137号墳よりも遡るであろう。三条突帯の円筒埴輪を出土することや、これまでの調査結果から、墳丘規模は137号墳を上回ることが推測される。帆立貝形古墳の８号墳は、埋葬施設に古相と考えられる胴張型横穴式石室を採用し、埴輪、TK209型式期の須恵器甕を出土することから、集成10期後半の築造が推定される（菅谷ほか1980）。

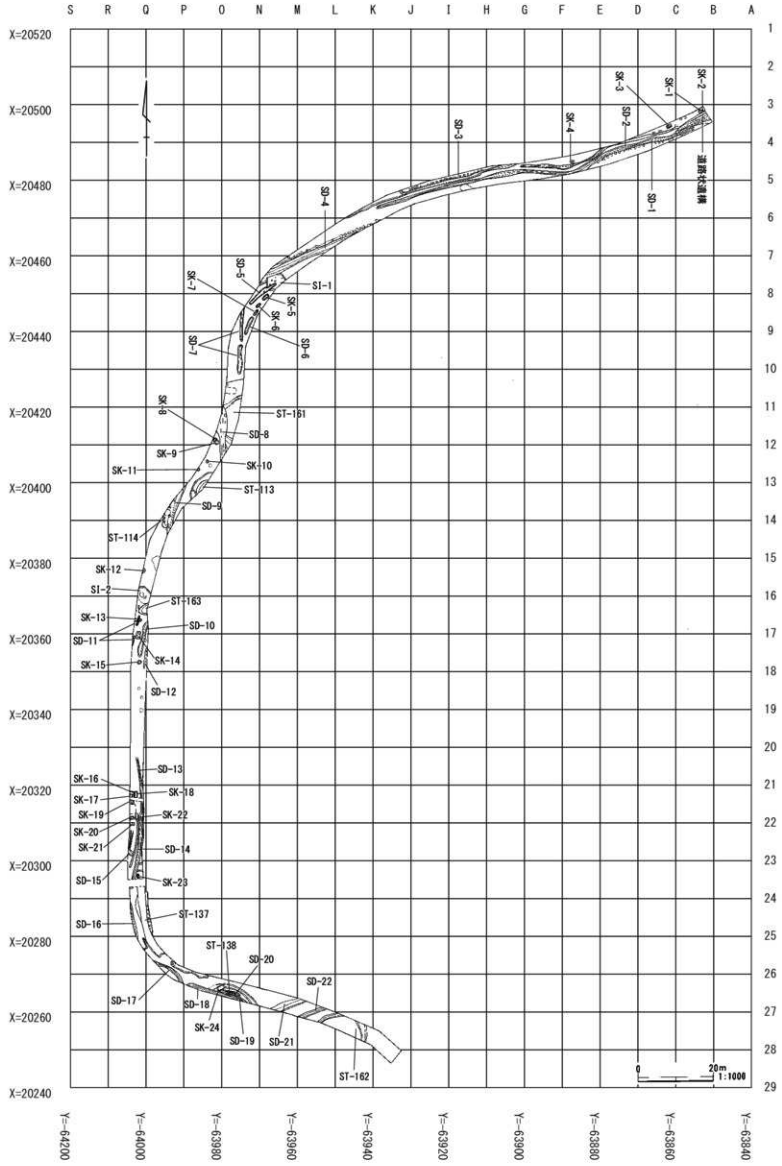
終末期には、盟主墳的な大型の円墳や方墳が見られず、横穴式石室を備える小型の円墳が数多く築造されている。８世紀代に下る古墳は、今のところ確認されず、７世紀後半のうちに築造を停止するようである。なお、単独墳である157号墳は、直径32ｍの円墳で、出土した円筒埴輪の外面二次調整にＢ種ヨコハケと黒斑が観察される（日高1994）。築造時期は長沖古墳群の初現に近く、集成５～６期に該当するだろう。



第２図　長沖古墳群古墳分布図



第３図　遺構位置図


S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
X=20520
X=20500
X=20480
X=20460
X=20440
X=20420
X=20400
X=20380
X=20360
X=20340
X=20320
X=20300
X=20280
X=20260
X=20240
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29
Y=64200
Y=64000
Y=63980
Y=63960
Y=63940
Y=63920
Y=63900
Y=63880
Y=63860
Y=63840
SK-2
SK-1
SK-3
SD-2
SD-1
SD-3
SK-4
SD-4
SD-5
SI-1
SK-7
SK-5
SK-6
SD-7
SD-6
SK-8
ST-161
SD-8
SK-9
SK-10
SK-11
ST-113
SD-9
ST-114
SK-12
SI-2
ST-163
SK-13
SD-10
SD-11
SK-14
SK-15
SD-12
SD-13
SK-16
SK-18
SK-17
SK-19
SK-22
SK-20
SK-21
SD-14
SD-15
SK-23
ST-137
SD-16
ST-138
SD-20
SD-22
SD-17
SD-18
SK-24
SD-19
SD-21
ST-162
0
20m
1:1000

第４図　遺構全体図

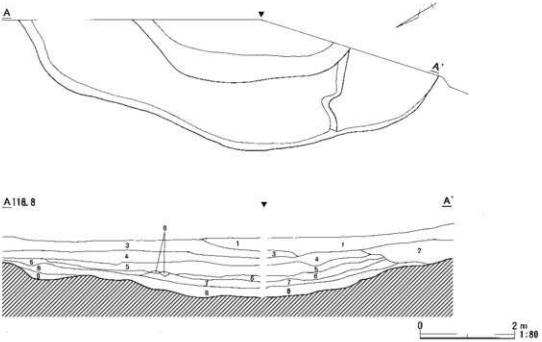
第Ⅲ章　調査の成果

1　調査の概要

長神古墳群梅原地区は小山川右岸の児玉丘陵上に位置し、付近の標高は約120mを測る。本書に報告のA地点において検出された遺構は、古墳７基、縄文時代の竪穴住居２棟、土坑24基、時期不詳の溝22条、道路跡１条である（第４図）。

これらの遺構の中では、前方後円墳の137号墳と縄文時代草創期の土器を出土した１・２号土坑の調査成果が特筆される。137号墳は発掘調査着手前に実施した測量の結果、東西に長い墳丘を有することから、当初は後代の開墾等により、円墳が変形したものと予測された。しかし、本調査区にかかる西側の墳丘裾部を発掘したところ、円筒埴輪が約１mの間隔で、直線的に原位置を保った状態で検出された。このことから、137号墳は主軸方向を東西に採り、前方部を西に向けた全長40m前後の前方後円墳であることが判明した。古墳の築造年代は、出土した円筒埴輪の形式から、古墳時代後期後半、実年代では６世紀後半に該当することが考えられる。また、埋葬施設には、南側へ開口する横穴式石室を採用していることが予測される。

縄文時代草創期の土器を出土した１・２号土坑は、ともに小規模な土坑であるが、当該時期の遺構としては、児玉地域で初めての検出例である。出土した土器はいずれも小片で、爪形文、押圧縄文が見られる。



113号墳土層説明

1　表　　土　現道路層。As-Aを少量含む。しまり強。
2　黒褐色土　As-A、拳大の礫、ロームブロックを少量含む。しまり弱。
3　暗褐色土　As-Aを少量含む。現耕作土層。
4　暗褐色土　旧耕作土層。
5　黒 色 土　有機質を多量に含み均質で緻密。粘性弱。
6　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。
7　黒 色 土　ロームブロックを多量に含む。
8　暗褐色土　黒色土ブロック、ロームブロックを多量に含み、斑状に堆積する。
9　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり弱。

第５図　113号墳平面図・断面図

2　古　墳

（1）１１３号墳（第５図）

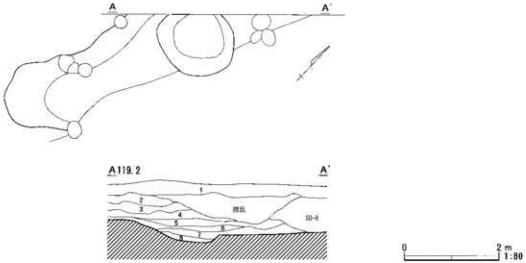
113号墳は、すでに墳丘を失っているが、地割りなどから存在が推定されていた古墳である。調査では、0-12・13グリッドにおいて、円弧を描く明瞭な落ち込みが検出され、周堀の一部と認められている。ただし、調査区においては、周堀内側の立ち上がりは検出されず、墳丘の規模は明らかではない。周堀外周の直径は15m程度にとどまることが推定されるので、比較的小規模な円墳であったと思われる。

周堀覆土は第５層以下９層までの各層で、黒色ないし褐色系の土層の堆積が認められる。上位層では、As-Aの混入が認められるのに対し、周堀覆土内にはAs-BやHr-FAなどの火山灰の混入は観察されない。遺物は出土していない。

（2）１１４号墳（第６図）

114号墳も、すでに墳丘を失い、地割りなどから存在が推定されていた古墳である。周堀は、確認面からの掘り込みは全体に浅く、P-13グリッドからP-14グリッドにかけて、緩やかに弧を描くように伸びたところで途切れている。調査区壁際には円形の土坑状の落ち込みが検出されているが、覆土の堆積状況から周堀の一部と認められる。墳丘規模を推定する根拠には乏しいが、直径15m前後の小規模な円墳と考えられる。

周堀覆土は第５層以下８層までの各層で、土層全体の色調や堆積の状態は、113号墳とよく似ている。上位層では、As-Aの混入が認められるのに対し、周堀覆土内にはAs-BやHr-FAなどの火山灰の混入は観察されない。なお、確認面より上位の第３層は、ロームブロックを多量に含む斑状の土層で、墳丘の崩落土と推定される。遺物も、113号墳と同じく、出土していない。



114号墳土層説明

1　暗褐色土　現耕作土層。As-Aを多量に含む。
2　暗褐色土　旧耕作土層。
3　褐 色 土　ロームブロックを多量に含む。古墳盛土の崩落による堆積層。
4　黒褐色土　旧耕作土層。
5　黒 色 土　しまり弱。
6　黒褐色土
7　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり強。
8　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。

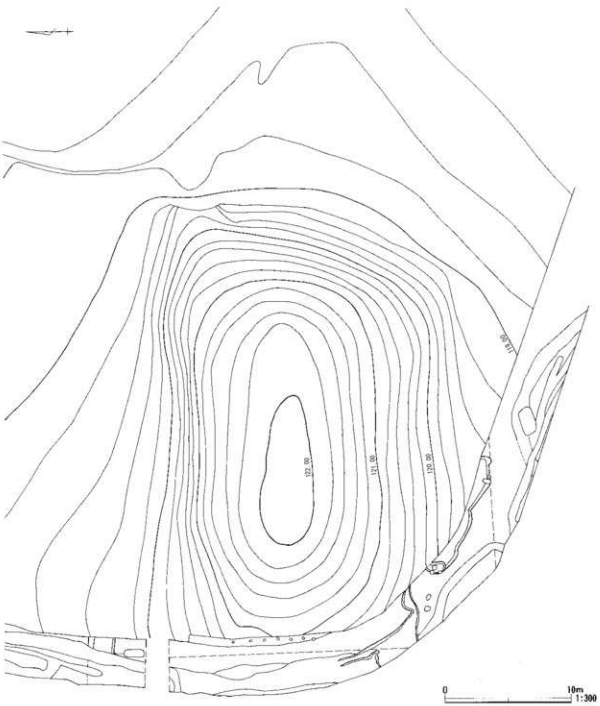
第６図　114号墳平面図・断面図

（３）１３７号墳（第７～15図）

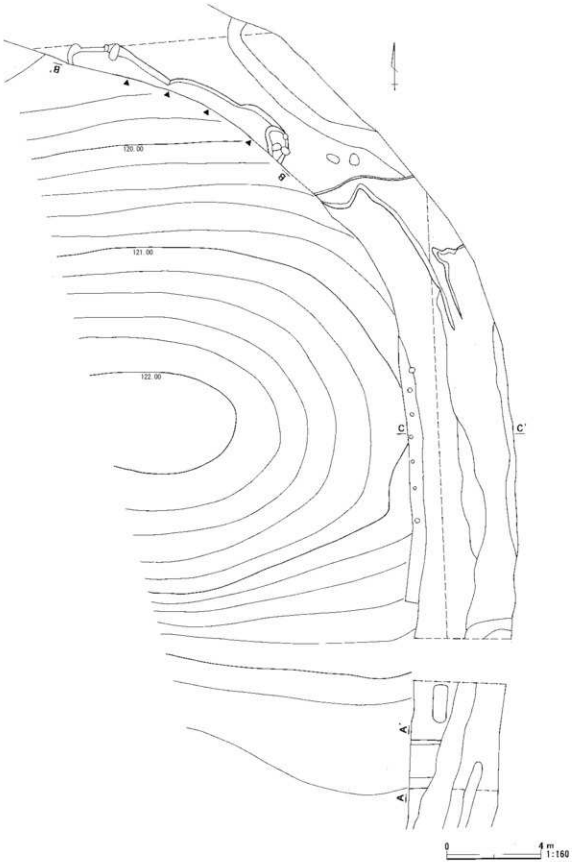
137号墳は現存長35ｍほどの前方後円墳である。調査区では、0-26グリッドからQ-23グリッドにかけて、前方部と周堀の一部を検出した。後円部東側が大きく削られているので、全長は40ｍ前後に復原されるであろう。築造時期は、出土した円筒埴輪の形態から、古墳時代後期後半と推定される。

①遺構

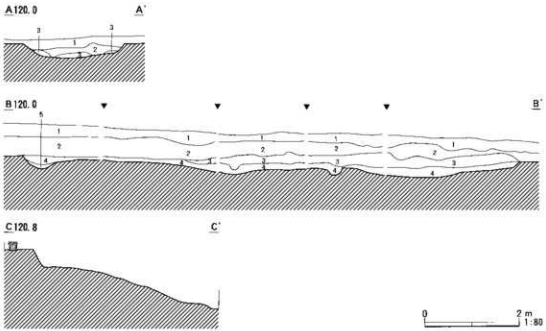
本調査区にかかるのは、前方部の先端とその前面に存在した周堀部分にあたるが、走行する溝や耕



第７図　137号墳平面図（１）



第８図　137号墳平面図（２）



137号墳土層説明［A－A′］

1　暗褐色土　現耕作土層
2　黒褐色土　ロームブロック、白色粒子を少量含む。粘性弱・しまり弱。
3　褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性弱・しまり弱。

［B－B′］

1　暗褐色土　現耕作土層
2　暗灰褐色土
3　黒褐色土　ロームブロック、暗褐色土ブロックを少量含む。粘性弱・しまり弱。
4　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性弱・しまり弱。
5　黒褐色土

第９図　137号墳断面図

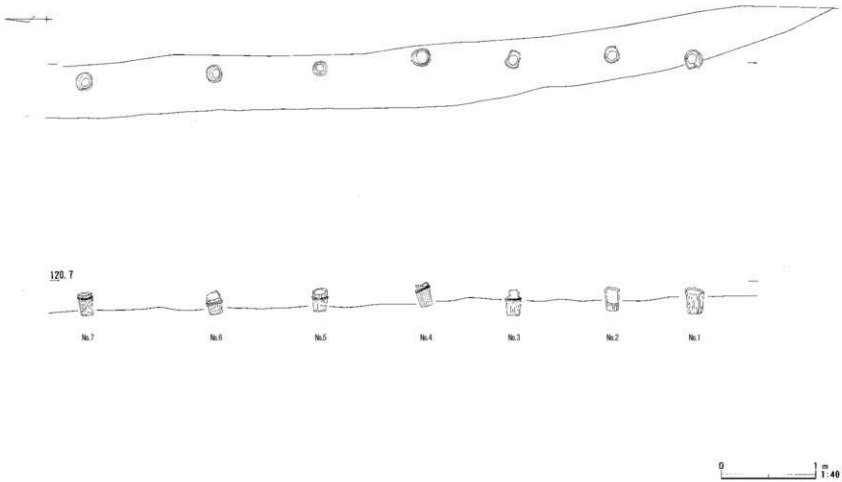
作に伴う表層の風化によって、遺構の原状はほぼ失われていると考えられる。円筒埴輪列が検出されたのは、墳丘裾部を巡る平坦面であるが、前方部先端の立ち上がりのラインは、左右の隅角に向かって弧を描くように削られていて、原形をとどめていない。周堀の可能性が考えられる遺構は、墳丘北西の隅角付近で検出された上幅約１ｍ、確認面からの深さ約30㎝の溝と、前方部の南側で調査区の縁に沿って検出された、浅く不定形の落ち込みの２箇所である。

②遺物

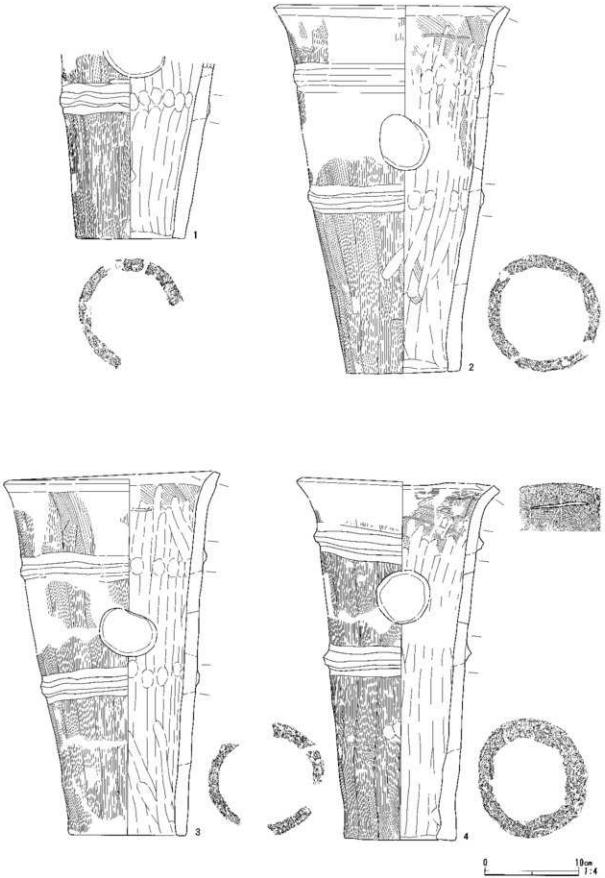
遺物は、前方部前面の墳丘裾部において、円筒埴輪７個体が真芯間0.9から1.4ｍの距離をとって、原位置で検出された（第８・10図）。そのほか、多数の円筒埴輪片および少数の朝顔形埴輪片、形象埴輪片が、周堀や溝、表土などから出土している。

円筒・朝顔形埴輪（第11～14図）

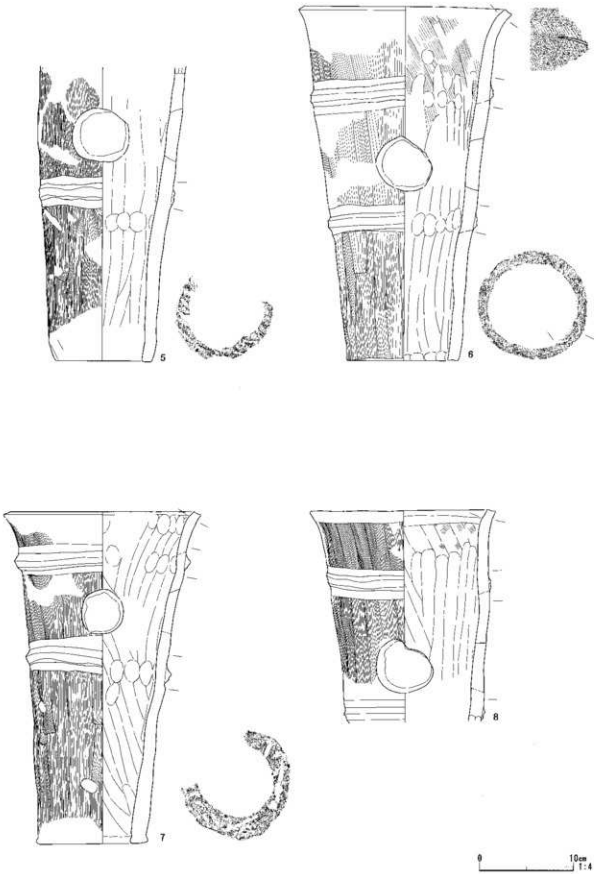
全形を確認できる円筒埴輪５個体は、すべて二条突帯三段構成である。137号墳は前方後円墳ではあるが、三条突帯四段構成の円筒埴輪は見られない。個体差はあるが、２・４・７のように、第一段の幅が広く、第三段の幅が狭くなる傾向が顕著に認められる。外面調整は一次タテハケに限られ、第二段に二孔一対の円形透孔を対面して配置している。６の基部外面には、板押圧による底部調整が認められる。２・３・４・６および11の最上段内面には、ヘラ状工具による横位もしくは斜位の直線状の線刻が観察される。27は唯一確認できた朝顔形埴輪個体で、口縁部の破片である。胎土には角閃石安山岩または角閃石を含む個体が目立つ。焼成は全体に良好で、赤褐色系の色調を示す資料が多い。



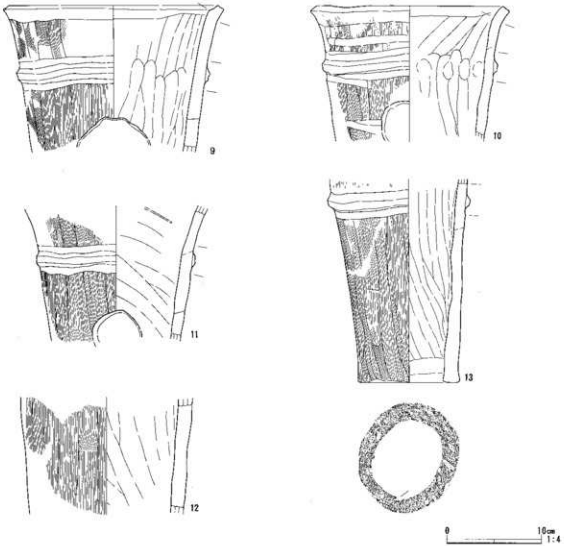
第10図　137号墳出土遺物状況図



第11図　137号墳出土埴輪（1）



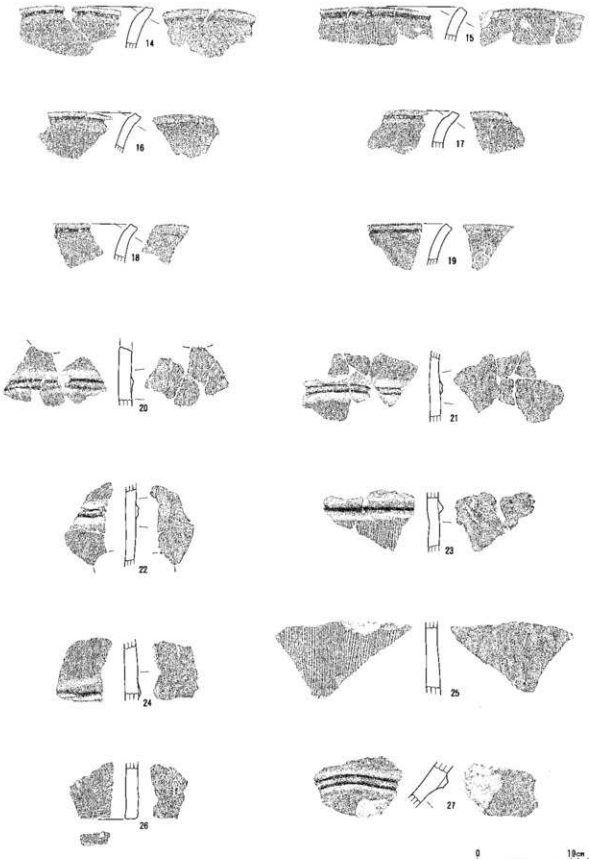
第12図　137号墳出土埴輪（2）



第13図　137号墳出土埴輪（３）

137号墳出土埴輪観察表

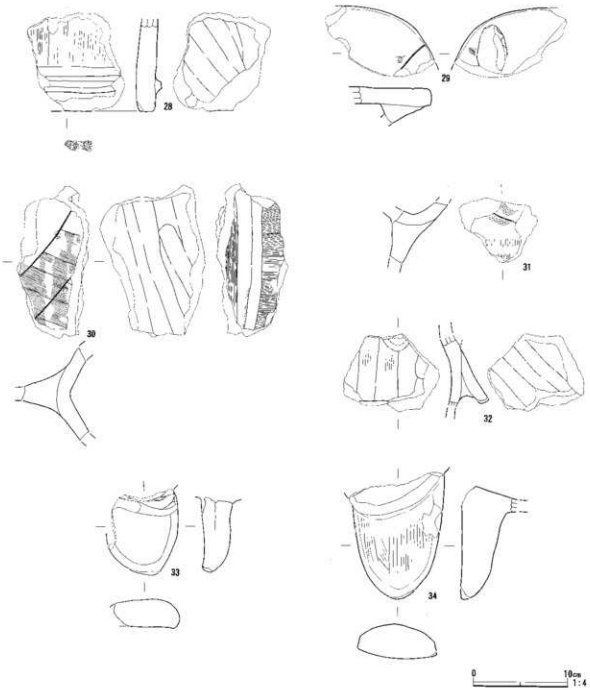
1	円筒埴輪	A．残存高19.5、１段高14.0、底部径(11.6)。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－橙色。F．１～２段下位。
2	円筒埴輪	A．口縁部径(25.0)、器高38.9、１段高18.8、２段高12.6、３段高7.5、底部径12.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．2/3。G．内面３段に線刻。
3	円筒埴輪	A．口縁部径(22.9)、器高38.5、１段高16.9、２段高12.8、３段高8.9、底部径(12.5)。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．3/4。G．内面３段に線刻。
4	円筒埴輪	A．口縁部径(21.5)、器高38.2、１段高19.7、２段高11.7、３段高6.1、底部径11.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．4/5。G．内面３段に線刻。
5	円筒埴輪	A．残存高31.3、１段高17.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ、底部調整あり。内面指ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．１～２段3/4。
6	円筒埴輪	A．口縁部径(22.4)、器高37.2、１段高15.0、２段高13.6、３段高8.6、底部径11.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－橙色。F．2/3。G．内面３段に線刻。



第14図　137号墳出土埴輪（4）

137号墳出土埴輪観察表

7	円筒埴輪	A．口縁部径(20.8)、器高35.1、1段高17.9、2段高11.9、3段高5.3、底部径（11.8)。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．3/4。
8	円筒埴輪	A．口縁部径19.6、残存高22.4、3段高7.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．2～3段2/3。
9	円筒埴輪	A．口縁部径(23.2)、残存高15.5、3段高7.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．2～3段片。
10	円筒埴輪	A．口縁部径(21.0)、残存高14.4、3段高6.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ、部分的にヨコナデ。内面指ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－橙色。F．2～3段片。
11	円筒埴輪	A．残存高14.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．2～3段片。G．内面3段に線刻。
12	円筒埴輪	A．残存高11.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－橙色。F．胴部片。
13	円筒埴輪	A．残存高21.5、1段高19.2、底部径10.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．1段4/5。
14	円筒埴輪	A．残存高4.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－にぶい赤褐色。F．口縁部片。
15	円筒埴輪	A．残存高3.6。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．口縁部片。
16	円筒埴輪	A．残存高4.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－にぶい赤褐色。F．口縁部片。
17	円筒埴輪	A．残存高4.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナナメハケ後ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－にぶい赤褐色。F．口縁部片。
18	円筒埴輪	A．残存高4.1。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－にぶい赤褐色。F．口縁部片。
19	円筒埴輪	A．残存高4.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．口縁部片。
20	円筒埴輪	A．残存高6.2。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－赤褐色。F．胴部片。
21	円筒埴輪	A．残存高7.5。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－赤褐色。F．胴部片。
22	円筒埴輪	A．残存高8.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．外－明赤褐色、内－赤褐色。F．胴部片。
23	円筒埴輪	A．残存高6.3。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－橙色。F．胴部片。
24	円筒埴輪	A．残存高6.4。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－赤褐色。F．胴部片。
25	円筒埴輪	A．残存高7.8。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面指ナデ。D．角閃石・白色粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．胴部片。
26	円筒埴輪	A．残存高6.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－赤褐色。F．1段片。
27	朝顔形円筒埴輪	A．残存高4.9。B．粘土紐積み上げ。C．外面タテハケ。内面ハケ後ナデ。D．角閃石安山岩粒・チャート。E．内外－明赤褐色。F．朝顔部片。



第15図　137号墳出土埴輪（５）

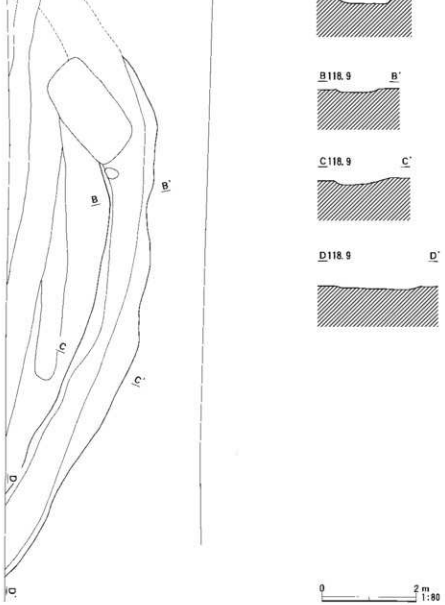
形象埴輪（第15図）

いずれも小片であるが、家、翳、靫、人物などの器種が特定できる。28は家形埴輪の壁の基部である。平板なつくりで、基底外面には突帯が貼付されている。29は翳上部の破片である。表面には放射状線刻の一部、裏面には補強帯の剥離痕が観察される。30は靫の一部で、矢筒から鰭の付け根にかけての破片である。表面には平行する２条の線刻が見られる。32は人物埴輪の上衣の裾部で、円筒状の胴部本体に、板状に成形した粘土帯を貼付して、衣の裾を表現している。33・34は台部から剥離した双脚全身像の人物埴輪の足である。ともに左足で履を着用した状態を表現している。

（４）１３８号墳（第16図）

138号墳は、137号墳の南側に、調査区を隔てて現存する古墳である。墳丘は周辺部を削り取られて大きく変形し、現状の墳丘は長径20m弱の歪んだ方形を呈している。

N-26グリッドから0-26グリッドにかけて、墳丘北側の周堀の一部を検出している。周堀の幅は50～60cmで、東半部はやや直線的になっている。全体に確認面からの掘り込みが浅く、一部に途切れている箇所がある。検出された周堀の形状や規模から推定すると、直径20mを超える円墳となるだろう。周辺の表土から埴輪の小片が出土しているが、138号墳に伴うものではないと考えられる。周堀から



第16図　138号墳平面図・断面図

は、遺物の出土はない。墳丘規模が直径20mを超える一方で、埴輪をもたないと考えられることから、築造時期は古墳時代終末期に下る可能性が高い。

（5）１６１号墳（第17図）

N-10・11・12グリッドおよびO-12グリッドにおいて検出された円墳である。墳丘はすでに消失し、周堀のみが検出された。周堀の幅は一定ではなく、確認面で1.5～5.0mを計測する。一部を南北に走行する８号溝によって切られている。墳丘規模は直径14m程度と推定される。

周堀覆土は第３層以下８層までの各層で、ロームブロックを含む黒色ないし褐色系の土層が堆積している。北側の土層断面B－B´では、覆土中位に褐色を呈するAs-Bの堆積が明瞭に認められた。遺物は出土せず、築造時期を積極的に推定する根拠に乏しい。

（6）１６２号墳（第18図）

K-27およびL-27グリッドにおいて検出された円墳である。161号墳と同じく、墳丘はすでに消失し、周堀のみが検出された。周堀の幅は一定ではなく、確認面で2.0～3.8mを計測する。また、墳丘の平面が整円形をなさず、北東―南西方向に長い。墳丘規模は長径約11m程度と推定される。

周堀覆土は第４層以下で、ロームブロックを含む黒色ないし褐色系の土層が堆積している。第３層では、As-Aの混入が認められるのに対し、周堀覆土内にはAs-Bなどの火山灰の混入は観察されない。遺物は出土していないが、墳丘が歪んだ円形を呈し、堀幅も狭いことから、築造時期は古墳時代終末期に下る可能性が高い。

（7）１６３号墳（第19図）

P-16およびQ-16グリッドにおいて検出された古墳である。墳丘はすでに消失し、周堀の一部のみが検出された。現状では土坑状の落ち込みとなっていて、西側へは延長していない。しかし、遺構確認面までは掘り込んでいないものの、調査区西壁の土層断面B－B´においても周堀覆土の堆積が観察され、この方向に周堀が延長していたことは明らかである。墳丘はこの周堀の北側に存在していたと推定されるが、墳丘を隔てた反対側では周堀は検出されず、墳丘規模については不明である。

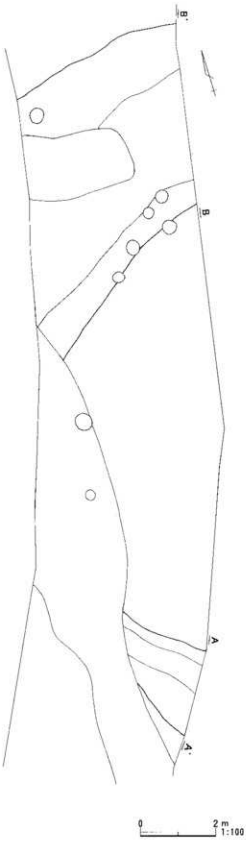
周堀覆土は第７層以下で、ロームブロックを含む黒色ないし褐色系の土層が堆積している。上位層では、As-Aの混入が認められるのに対し、周堀覆土内にはAs-Bなどの火山灰の混入は観察されない。遺物は出土せず、築造時期を積極的に推定する根拠に乏しい。

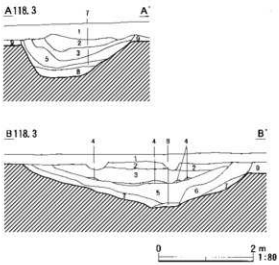
（8）調査区出土埴輪（第20図）

調査区からは特定の古墳には伴わないものの器種やその部位の明らかな形象埴輪片が少数出土している。これらの資料を調査区出土遺物として一括して掲載する。

１は家形埴輪で、屋根の破風部分の破片である。２は翳形埴輪で、翳形の中でも星形翳といわれ器種に該当する。中央部に円孔があり、円孔の周辺部には円形付文が配されている。３・４はともに板状の破片で、一部に直線的な端面が残る。３の裏側は剥離面となっている。盾もしくは靫の端部と考えられる。４は上面と側面が端面となっている。靫の鰭の上端部にあたる。

５・６は人物埴輪である。５は顔面の破片で、筒状に成形した頭部本体に、U字上の粘土帯を貼付して顔面の輪郭を表現している。鼻は剥離している。左側頭部には下げ美豆良の脱落痕が観察される。頭部には粘土粒を貼付して首飾が表現されている。６は台部から剥離した双脚全身像の足である。左右の区別はつかないが、履を着用した状態を表現している。

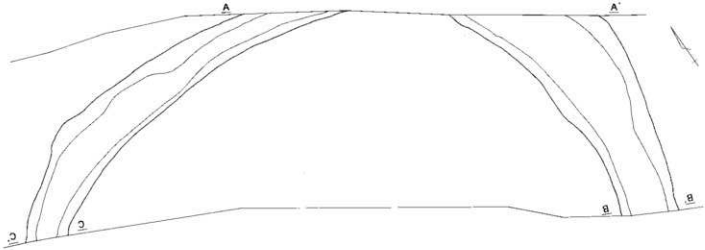




161号墳土層説明

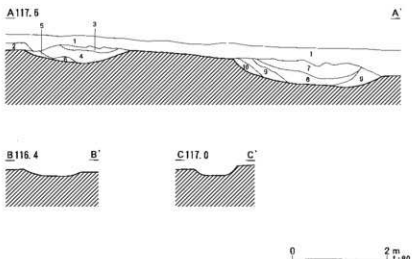
1　表　　土　耕作土層。
2　暗 褐 色 土　As-A、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
3　黒 褐 色 土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
4　褐色火山灰　As-Bの堆積層。
5　黒　色　土　白色土ブロック、ロームブロックを少量含む。粘性強。しまり弱。
6　暗 褐 色 土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
7　褐　色　土　鉄斑、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
8　暗黄褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
9　黒　色　土　旧表土層。

第17図　161号墳平面図・断面図

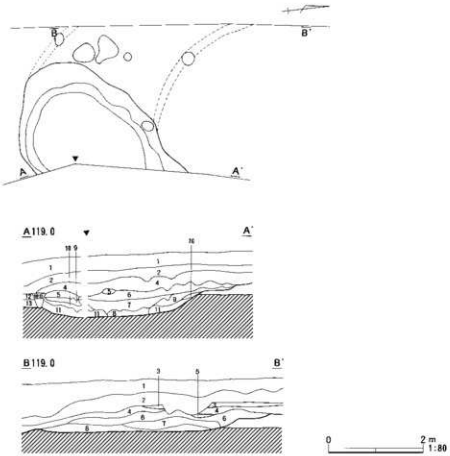


162号墳土層説明

1　表　　土　現耕作土層。
2　暗灰褐色土　現耕作土を主体に、ロームブロックを多量に含む。
3　黒 褐 色 土　As-A、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
4　暗 褐 色 土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
5　暗黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり弱。
6　暗 褐 色 土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり弱。
7　黒　色　土　白色土ブロック、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
8　黒 褐 色 土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
9　暗 褐 色 土　白色土ブロック、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
10　暗 褐 色 土　粘質土ブロックを少量含み、ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり弱。



第18図　162号墳平面図・断面図



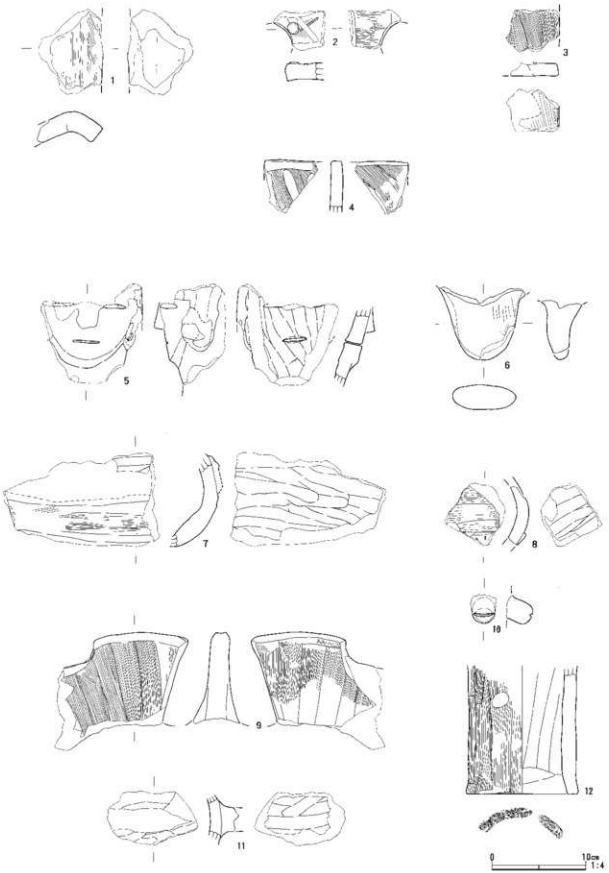
163号墳土層説明

1　表　　土　現道路層。
2　暗灰褐色土　As-Aを多量に含む。路盤層。
3　黒灰褐色土　As-Aを多量に含む。路盤層。
4　黒灰褐色土　As-Aを多量に含む。路盤層。
5　黒 灰 色 土　白色土ブロック、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
6　黒　色　土　As-Aを多量に含み、白色土ブロック、ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
7　黒　色　土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
8　黒 灰 色 土　ロームブロックを多量に含む。粘性強。しまり弱。
9　黒　色　土　白色土ブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
10　褐　色　土　ロームブロックを多量に含む。粘性強。しまり弱。
11　明 褐 色 土　風化ロームを主体とする。粘性・しまり強。
12　暗 褐 色 土　風化ロームを主体とする。粘性・しまり弱。
13　明 褐 色 土　風化ロームを主体とする。粘性・しまり弱。

第19図　163号墳平面図・断面図

7～10はいずれも馬形埴輪の破片である。7・8はともに頭の一部である。7は筒状の本体表面に、面繋を表現していた粘土帯の剥離痕が観察される。8は7と別個体で、貼付した粘土帯に、ヘラ状工具による刺突を加え、革製の面繋を表現している。9は馬の本体から剥離した鬣先端部の破片である。下部両面に粘土帯を追加して、頸部に貼付している。先端には前髪を棒状に結んだ表現が見られず、上縁には切り込みを設けて段差を造り出している。10は小型の鈴で、造りは中実式である。大きさからして、胸繋から脱落した鈴と考えられる。

11は器種を特定できないが、上下左右に湾曲した本体に、幅の広い突帯状の粘土を貼付した特徴的な破片である。12は円筒状の破片で、薄く丁寧なつくりをしている。上位に向かって開かないことから、器種は特定できないが、靫、靫などといった器財形埴輪の台部と考えられる。

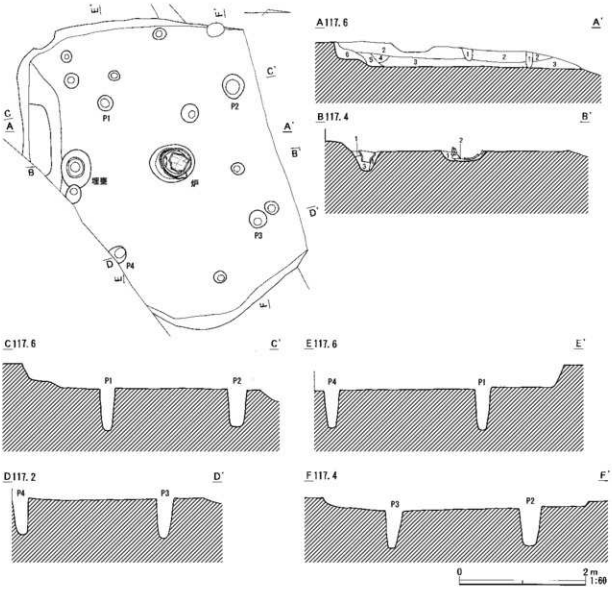


第20図　調査区出土埴輪

3 住 居

（1） 1号住居（第21～26図）

M-7グリッドにおいて検出した住居跡である。北側は4号溝に切られ失われており、南東側は調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。南西側と東側に屈強部を有するため、平面形は、歪な五角形に近い形か、かなり歪んだ隅丸方形のような形になりそうである。規模は、東西方



1号住居土層説明

1 黒灰褐色土 攪乱。
2 暗 褐 色 土 ロームブロックを多量に含む。粘性弱。しまり強。
3 淡黄褐色土 粘性・しまり強。
4 暗 褐 色 土 粘性・しまり弱。
5 淡黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。粘性強。しまり強。
6 暗 褐 色 土 しまり弱。

1号住居炉・埋甕土層説明

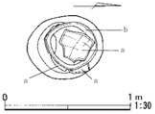
1 暗黄褐色土 風化ロームを主体に、ロームブロック少量含む。粘性弱。しまり強。
2 暗 褐 色 土 焼土ブロック・炭化物ブロック・ロームブロックを少量含む。粘性・しまり弱。
3 暗 褐 色 土 ロームブロック少量含む。粘性・しまり弱。

第21図 1号住居平面図・断面図

向での最大長が4.80m、南北方向での現存長は、4.05mである。壁の立ち上がりは、全体にゆるやかで、壁高は、北東壁で6cm、南壁で17cm、西壁の残りのよい部分で35cmである。南壁に沿って高さ10～12cmの上面が平らな平場をなす土段状の高まりが堀り残され作出されている。後述する埋甕が入口部を示すとすれば、出入のための付帯施設の可能性が考えられる。床面は全体にほぼ平坦で、所々硬化している。

主柱穴は、P１～P４の４つである。上端での平面形は、いずれも円形で、深さは、P１が67cm、P２が58cm、P３が63cm、P４が59cmである。他に床面で10個のピットを検出している。

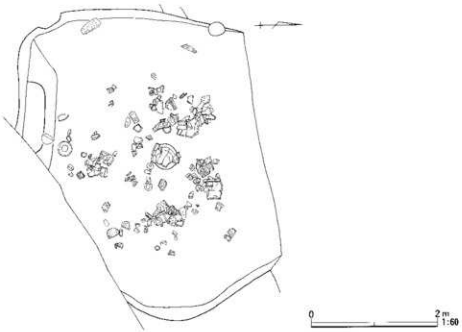
南壁側の土段状をなした高まりの裾に沿って、ピットが掘り込まれており、その中に深鉢（第24図５）が埋置されている。入口部の埋甕であろう。ピットは、平面形が楕円形で、長径69cm、短径47cmで、深さ30cmである。ピットの下部の大半をロームブロックをわずかに含む暗褐色土で埋めた後、５の深鉢を正位で据え、風化したロームを主とする暗黄褐色土で裏込めしている。



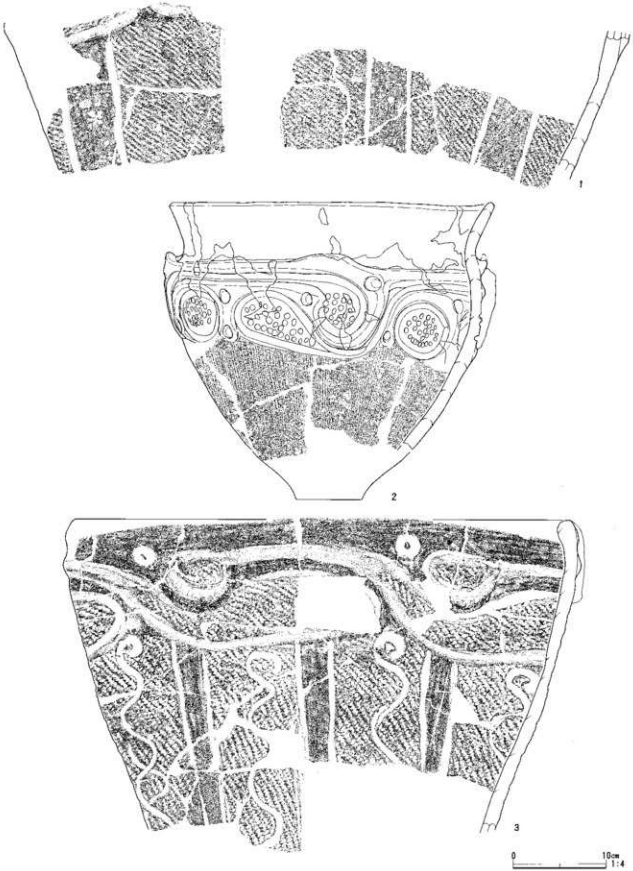
第22図　１号住居炉平面図

炉は、埋甕炉で、現存する床面のほぼ中央に設けられている。床面を掘りくぼめ、深鉢片（第24図１：炉体土器ａ）を炉の中央を取り巻くように巡らし、両耳鉢の破片（第24図２：炉体土器ｂ）を炉床に置いている。炉の掘り込みの平面形は、楕円形で、長径73cm、短径58cm、深さは17cmである。

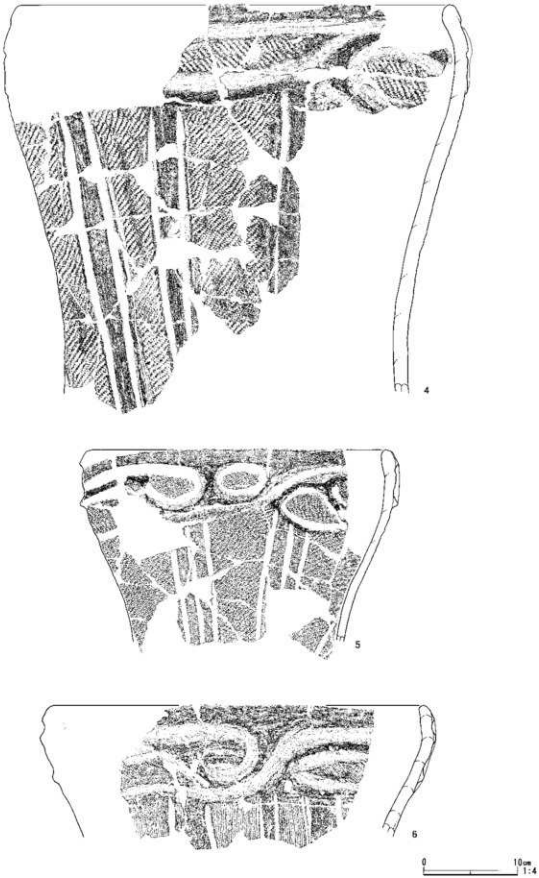
覆土は、攪乱である１層を除く５層に分けられた。全体にロームを多く含む淡黄褐色土、暗褐色土が、壁際以外では、ほぼ水平に堆積していた。埋甕や炉体土器の他に、炉を取り巻く１～1.5 mの範囲の主に覆土中層～上層から、欠損した縄文土器や同大型片が集中して出土している。住居形態、出土遺物から見て、縄文時代中期後葉、加曽利ＥⅢ式期の住居跡と考えられる。



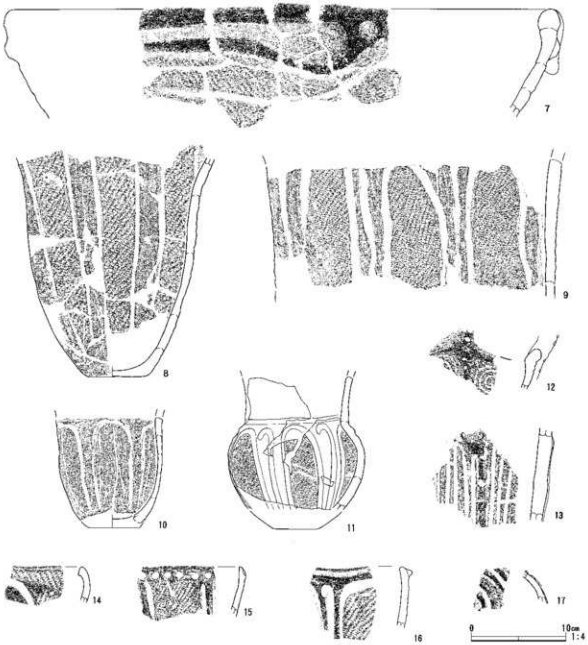
第23図　１号住居出土遺物状況図



第24図　１号住居出土遺物（１）



第25図　１号住居出土遺物（２）



第26図　1号住居出土遺物（3）

1号住居出土土器観察表

1	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部を隆帯紋・回線紋で区画。胴部を2条1対の回線紋で縦位区画。区画内に単節縄紋(LR)。内面は縦位ミガキ。D.片岩。E.内外ーにぶい黄橙色。F.胴部中位1/2。G.加曽利E皿式。
2	縄文土器 両耳鉢	A.口縁部径(34.5)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部横位ミガキ。肩部を隆帯紋・回線紋で楕円状・横S字状区画。空白部に窩文→区画内に刺突紋。胴部に櫛歯状工具による条線紋。内面は口縁部～肩部横位ミガキ、胴部縦位ミガキ。D.角閃石。E.外ー明赤褐色、内ーにぶい黄橙色。F.口縁部～胴部1/2。G.加曽利E皿式。
3	縄文土器 深鉢	A.口縁部径52.8。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部を隆帯紋・回線紋で横S字状区画、空白部に小円文。胴部を2条1対の回線紋で縦位区画。口縁部・胴部の区画内に単節縄紋(LR)→胴部に回線紋で蛇行蕨手文。内面は縦位ミガキ、口唇部下のみ横位ミガキ。D.片岩。E.内外ー黄褐色。F.口縁部～胴部ほぼ完形。G.加曽利E皿式。
4	縄文土器 深鉢	A.口縁部径36.2。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部を隆帯紋・回線紋で横S字状区画。胴部を2・3条1対の回線紋で縦位区画。口縁部・胴部の区画内に単節縄紋(RL)。内面は口縁部横位ミガキ、胴部縦位ミガキ。D.片岩。E.内外ー褐灰色。F.口縁部～胴部ほぼ完形。G.加曽利E皿式。

1号住居出土土器観察表

5	縄文土器 深鉢	A.口縁部径32.4。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部を隆帯紋・回線紋で楕円状・横S字状区画。胴部を3条1対の回線紋で縦位区画。区画内に単節縄紋(RL)。内面は口縁部～胴部上半横位ナデ、胴部下半斜位ナデ。D.片岩、角閃石。E.外－にぶい黄褐色、内－明褐色。F.口縁部～胴部ほぼ完形。G.加曾利E Ⅲ式。
6	縄文土器 深鉢	A.口縁部径(40.6)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部を隆帯紋・回線紋で横S字状区画、空白部に窩文。胴部を2条1対の回線紋で縦位区画。口縁部・胴部の区画内に櫛歯状工具による条線紋。内面は横位ミガキ。D.片岩。E.内外－浅黄橙色。F.口縁部1/4。G.加曾利E Ⅲ式。
7	縄文土器 深鉢	A.口縁部径(57.8)。B.粘土紐積み上げ。C.口縁部を隆帯紋・回線紋で横S字状区画。区画内に単節縄紋(RL)。内面は横位ミガキ。D.片岩。E.外－橙色、内－にぶい黄褐色。F.口縁部破片。G.加曾利E Ⅲ式。
8	縄文土器 深鉢	A.底部径6.2。B.粘土紐積み上げ。C.胴部を2条1対の回線紋で縦位区画。区画内に単節縄紋(RL)。内面は縦位ミガキ。D.片岩。E.内外－にぶい黄橙色。F.胴部7/8・底部1/2。G.加曾利E Ⅲ式。
9	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.胴部を3条1対の回線紋で縦位・逆U字状区画。区画内に単節縄紋(RL)。内面は縦位ミガキ。D.片岩。E.内外－にぶい黄橙色。F.胴部中位1/3。G.加曾利E Ⅲ式。
10	縄文土器 深鉢	A.底部径(5.3)。B.粘土紐積み上げ。C.胴部を回線紋で逆U字状に区画。区画内に櫛歯状工具による条線紋。内面は縦位ミガキ。D.片岩。E.外－橙色、内－にぶい黄褐色。F.胴部ほぼ完形。G.加曾利E Ⅲ式。
11	縄文土器 鉢	B.粘土紐積み上げ。C.口縁部縦位ミガキ。胴部に回線紋で逆U字状区画、蕨手文。区画内に単節縄紋(RL)。内面は口縁部～胴部上半横位ミガキ、胴部下半縦位ミガキ。D.片岩、角閃石。E.外－黄橙色、内－にぶい黄橙色。F.口縁部1/4・胴部1/3。G.加曾利E Ⅲ式。
12	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.キザミ付隆帯紋→隆帯紋脇等に細い角頭状工具による有節沈線紋(3条)。扇状把手。内面は横位ミガキ。D.雲母。E.内外－にぶい黄橙色。F.口縁部破片。G.阿玉台Ⅱ式。
13	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.隆帯紋→丸頭状工具による条線紋。内面は横位ナデ。D.角閃石。E.内外－にぶい橙色。F.胴部破片。G.曾利式。
14	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.回線紋で区画→単節縄紋(RL)。内面は横位ミガキ。D.特になし。E.内外－にぶい橙色。F.口縁部破片。G.加曾利E Ⅲ式。
15	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.2条1対の回線紋で縦位区画。口唇部下に円形刺突紋列。区画内に単節縄紋(RL)。内面は口縁部横位ミガキ、胴部縦位ミガキ。D.特になし。E.内外－にぶい橙色。F.口縁部破片。G.加曾利E Ⅲ式。
16	縄文土器 鉢	B.粘土紐積み上げ。C.回線紋で区画、蕨手文。区画内に単節縄紋(RL)。内面は横位ミガキ。D.特になし。E.内外－にぶい黄橙色。F.口縁部破片。G.加曾利E Ⅲ式。
17	縄文土器 鉢	B.粘土紐積み上げ。C.微隆起線紋。赤彩痕。内面は横位ミガキ。赤彩痕。D.角閃石。E.内外－浅黄橙色。F.口縁部破片。G.中期末～後期初頭。

（2） 2号住居（第27・28図）

P-15・16、Q-15・16グリッドにおいて検出した住居跡である。南側は、163号墳に切られ、失われており、東側、西側は調査範囲外である。確認面は、黄褐色のローム層上面である。

平面形は、歪な楕円形に近い形になろうか。規模は、いずれも残存長になるが、北西－南東方向で4.50m、北東－南西方向で3.38mである。壁が残存するのは、北東から北西にかけて曲線を描く部分だけであるが、壁の立ち上がりは比較的しっかりしている。壁高は、北西端で8cm、北東端で14cmである。床面は、ほぼ平坦であるが、硬化は顕著ではない。北側の一部を除いて、幅12～17cm、深さ4～10cmほどの壁溝が掘られている。

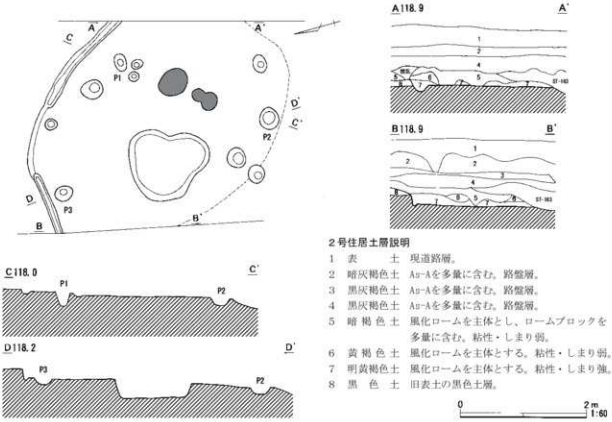
P1～P3は、柱穴の可能性があると考えたピットである。いずれも上端での平面形がやや歪な円形、楕円形で、深さは、P1が23cm、P2、P3が10cmである。並びに問題があるとともに、浅いため、柱穴と断定するには問題が残る。他に床面で7個のピットを検出している。また、床面中央のやや西寄りで、上端の平面形が洋梨形の土坑を検出している。上端での最大長1127 cm、最深部での深さは30cmである。時期が異なる土坑の可能性もあるが、一応本住居跡に伴うものとしておきたい。

床面中央やや東寄りで焼土の集中部を2箇所検出している。炉跡とも見られるが、掘り込みが見ら

れず、被熱赤化の痕跡も顕著ではないようである。

覆土は、第27図の６・７層の２層である。「旧表土」の黒色土である８層を掘り込んで造られており、何らかの形で覆土の多くを失った後、風化ロームを主とする５層に被覆された模様である。覆土そのものも所々床面まで失われている。

遺物は、覆土中より縄文土器片や石器片が少数出土したのみである。出土遺物から見て、縄文時代前期後半、諸磯ｃ式期の住居跡と考えられる。

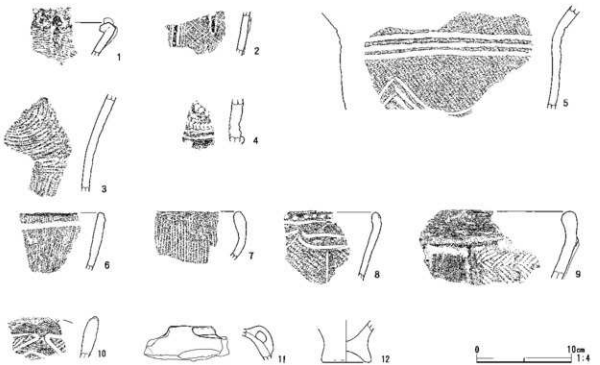


第27図　２号住居平面図・断面図

第28図　２号住居出土土器

２号住居出土土器観察表

1	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.単節縄紋(LR)→半截竹管状工具による集合沈線紋。内面は横位ナデ。D.片岩。E.内外－にぶい黄橙色。F.胴部破片。G.前期後葉。
2	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.半截竹管状工具による集合沈線紋→貼付紋。内面はナデ。D.片岩。E.内外－橙色。F.胴部破片。G.諸磯ｃ式。
3	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.半截竹管状工具による集合沈線紋→有節浮線紋・貼付紋。内面は横位ナデ。D.片岩。E.内外－赤褐色。F.口縁部破片。G.諸磯ｃ式。
4	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.半截竹管状工具による集合沈線紋→有節浮線紋。内面はナデ。D.片岩。E.内外－にぶい橙色。F.口縁部破片。G.諸磯ｃ式。



第29図　調査区出土土器

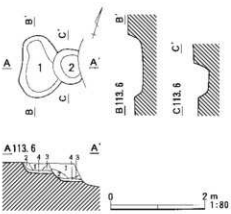
調査区出土土器観察表

1	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.半截竹管状工具による集合沈線紋→貼付紋。内面はナデ。D.片岩。E.内外－にぶい橙色。F.口縁部破片。G.諸磯c式。
2	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.半截竹管状工具による集合沈線紋・格子紋→キザミ付貼付紋。内面はナデ。D.片岩。E.内外－赤褐色。F.胴部破片。G.諸磯c式。
3	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.半截竹管状工具による集合沈線紋→有節浮線紋。内面はナデ。D.片岩。E.内外－にぶい橙色。F.胴部破片。G.諸磯c式。
4	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.隆帯紋→隆帯紋脇に半截竹管状工具による平行沈線紋→三角押紋→三叉文。内面はナデ。器面荒れ。D.片岩。E.内外－にぶい橙色。F.胴部破片。G.勝坂Ⅰ式。
5	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.単節縄紋(LR)→丸頭状工具による沈線紋で横位区画・連弧文。内面は縦位ケズリ→横位ミガキ。D.特になし。E.内外－にぶい褐色。F.頸部1/4。G.加曽利E Ⅱ式。
6	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.櫛歯状工具による条線紋→角頭状工具による沈線紋で口唇部下を横位区画。内面は横位ミガキ。D.片岩。E.内外－にぶい黄橙色。F.口縁部破片。G.中期後葉。
7	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.櫛歯状工具による条線紋。内面は横位ケズリ→横位ミガキ。D.特になし。E.外－にぶい黄橙色、内－にぶい黄褐色。F.口縁部破片。G.曽利式。
8	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.丸頭状工具による沈線紋で口縁部に連弧文、胴部に縦位区画→口唇部下に円形刺突紋列。区画内に単節縄紋(LR)。内面は縦位ミガキ。D.特になし。E.内外－灰黄褐色。F.口縁部破片。G.加曽利E Ⅲ式。
9	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.隆帯紋で横位・縦位区画→区画内に無節縄紋(L)。内面は横位ミガキ。D.角閃石。E.内外－にぶい黄橙色。F.口縁部破片。G.加曽利E Ⅳ式。
10	縄文土器 深鉢	B.粘土紐積み上げ。C.丸頭状工具による併行沈線紋→沈線紋間に単節縄紋(LR)。内面は横位ミガキ。D.角閃石。E.内外－にぶい橙色。F.口縁部破片。G.称名寺Ⅰ式。
11	縄文土器 鉢	B.粘土紐積み上げ。C.回線紋。横状把手。内面は横位ミガキ。赤彩痕。D.特になし。E.内外－橙色。F.口縁部破片。G.加曽利E Ⅲ式。
12	縄文土器 鉢	A.底部径5.2。B.粘土紐積み上げ。C.縦位ナデ。内面はナデ。工具痕。D.片岩、角閃石。E.内外－淺黄橙色。F.底部。G.中期後葉。

4　土　坑

土坑は24基を検出した。遺物を伴わない例がほとんどで、帰属年代を特定できる遺構は少ない。そのなかで、B-3グリッドにおいて、重複して検出された1・2号土坑から、縄文時代草創期の土器片が出土した点は特筆される（第30・31図）。

1号土坑は不整形をなし、長径1.32m、短径約1.0m、確認面からの深さ21cm、2号土坑はほぼ円形を呈し、直径0.73m、確認面からの深さ約37cmを測る。覆土は全体に暗褐色ないし黄褐色で、1・



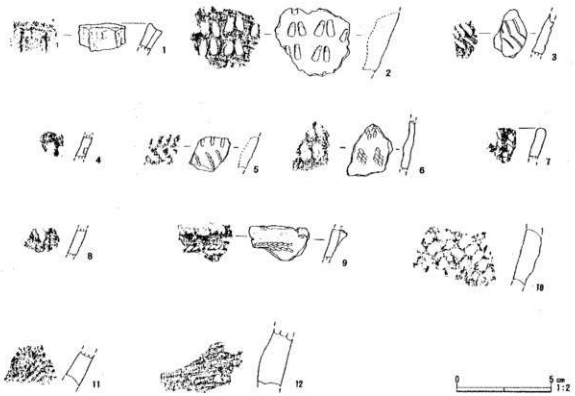
第30図　1・2号土坑平面図・断面図

1号土坑土層説明

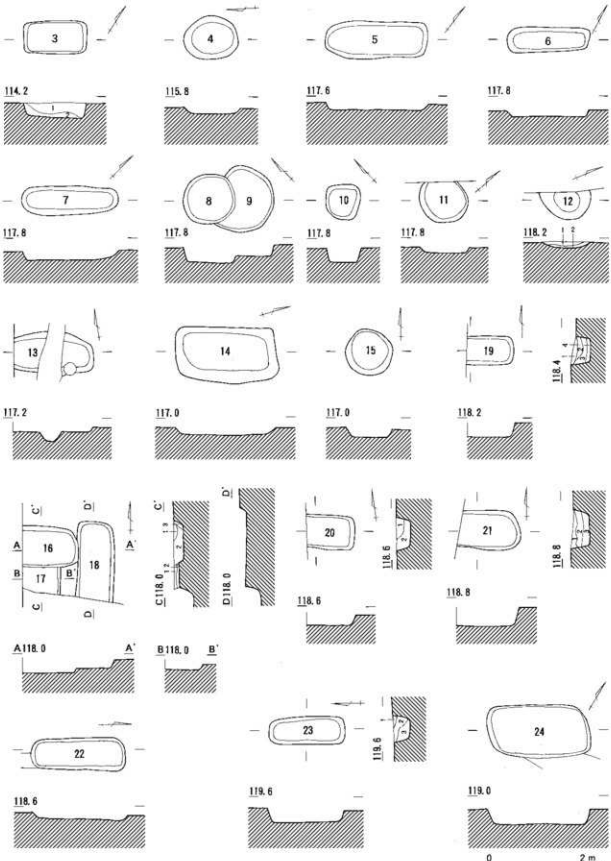
1　暗褐色土　白色パミス、礫を多量に含む。粘性弱。しまり強。
2　暗褐色土　ロームブロック、白色パミス、赤色スコリアを少量含む。粘性無し。しまり強。
3　暗褐色土　ロームブロック、白色パミスを少量含む。粘性無し。しまり強。
4　黄褐色土　ロームブロック、白色パミスを少量含む。粘性弱。しまり強。

2号土坑土層説明

1　暗褐色土　白色パミス・炭化物ブロックを多量に含む。粘性無し。しまり強。
2　暗黄褐色土　ロームブロック、白色パミスを少量含む。粘性無し。しまり強。
3　暗黄褐色土　ロームブロック、白色パミス、黒色スコリアを少量含む。粘性無し。しまり強。
4　暗黄褐色土　ロームブロックを多量に含み、白色パミスを少量含む。粘性弱。しまり強。



第31図　1・2号土坑出土土器



第32図　3～24号土坑平面図・断面図

3号土坑土層説明

1　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

2　黒褐色土　大粒のロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

12号土坑土層説明

1　暗茶褐色土　ロームブロック・白色土ブロックを少量含む。粘性・しまり無し。

2　褐　色　土　ロームブロックを多量に含む。粘性無し。しまり弱。

16号土坑土層説明

1　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり無し。

2　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。

3　明茶褐色土　粘性無し。しまり弱。

17号土坑土層説明

1　黒褐色土　ロームブロック、As-Aを少量含む。粘性・しまり無し。

2　茶褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

19号土坑土層説明

1　黒褐色土　ロームブロック・黒色パミスを少量含む。粘性・しまり無し。

2　黒褐色土　ロームブロックを少量含む。粘性・しまり無し。

3　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

4　黒褐色土　大粒のロームブロックを少量含む。粘性・しまり無し。

20号土坑土層説明

1　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

2　黒褐色土　大粒のロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

21号土坑土層説明

1　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

2　黒褐色土　ロームブロック、As-Aを少量含む。粘性・しまり無し。

3　暗茶褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

23号土坑土層説明

1　茶褐色土　粘性弱。しまり強。

2　暗茶褐色土　黒色土ブロックを多量に含む。粘性弱。しまり強。

3　黄茶褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性・しまり無し。

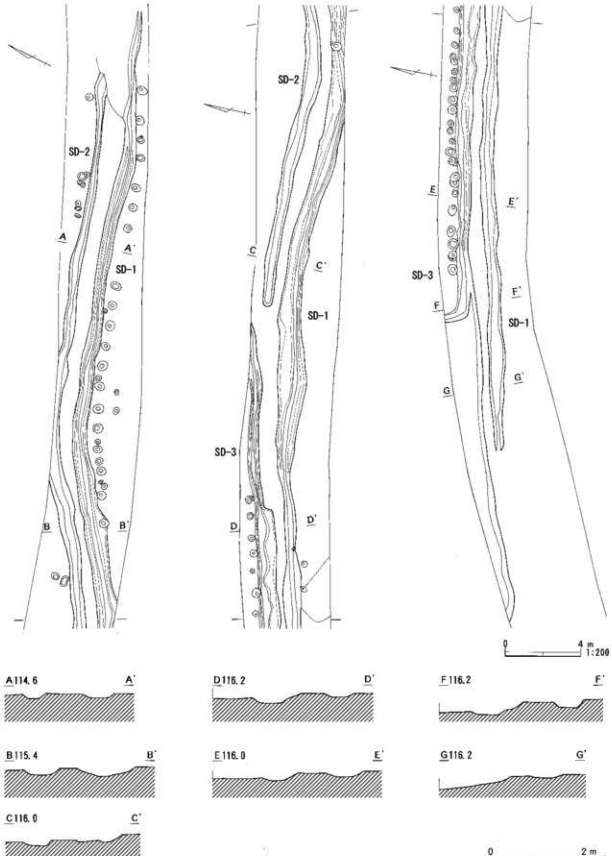
土坑一覧表

番号	位　置	形　態	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
1	B-3	不整形	1.32	1.00	0.21
2	B-3	円　形	0.73	－	0.37
3	C-3	長方形	1.34	0.68	0.30
4	E-4	不整円形	1.16	0.92	0.12
5	M・N-8	不整形	2.16	0.78	0.16
6	N-8	不整形	1.74	0.52	0.15
7	N-8	不整形	2.04	0.60	0.18
8	0-11	円　形	1.10	1.05	0.31
9	0-11・12	不整円形	－	1.41	0.18
10	0-12	不整形	0.74	0.72	0.30
11	0-12	不整円形	1.02	－	0.10
12	Q-15	不整形	1.03	－	0.12
13	Q-16	不整形	－	0.82	0.10
14	Q-16・17	長方形	2.14	1.18	0.15
15	Q-17	円　形	1.00	0.96	0.20
16	Q-21	不　明	－	0.86	0.22
17	Q-21	不　明	－	－	0.12
18	Q-21	不　明	－	0.78	0.13
19	Q-21	不　明	－	0.61	0.35
20	Q-21	不　明	－	0.71	0.28
21	Q-22	不　明	－	0.81	0.36
22	Q-21	長方形	2.10	0.67	0.15
23	Q-23	長方形	1.62	0.58	0.34
24	0-26	長方形	2.17	1.12	0.32

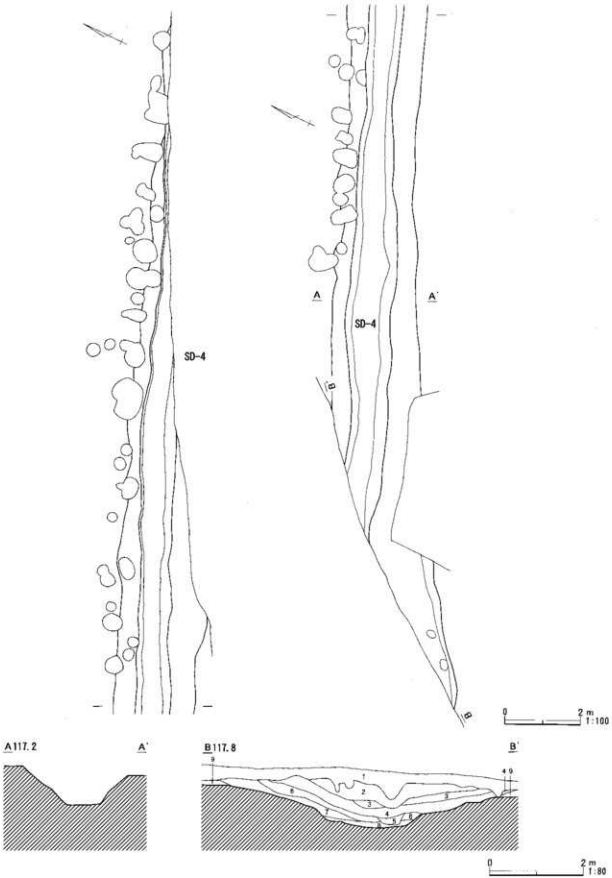
２号土坑ともに、非常に硬くしまっているが、１号土坑の第1層には多量の礫が混入し、２号土坑の第１層には炭化物ブロックの混入が目立つという相違がある。土層堆積状況の観察から、新旧関係が明らかで、１号土坑が古く、２号土坑が新しい。

縄文時代草創期の土器片は、双方の土坑から出土している。文様には、爪形文、押圧縄文、刺突文および押圧縄文と刺突文の複合文様が見られる。なお、一部に他時期の土器（第31図10～12）の混入も認められることから、土器片は本来1号土坑に伴うもので、同遺構の覆土を切って開削したことにより、２号土坑の覆土にも混入したと見ることもできる。

その他、C-３グリッドに所在する３号土坑や、Q-21グリッドに所在する20号土坑のように、大粒のロームブロックを多量に含み、比較的短期間のうちに周辺から土の流入があったと考えられる遺構が認められる。また、Q-22グリッドの21号土坑のように、覆土中にAs-Aの混入が観察される例もあり、開削時期が近世以降に下る遺構も含まれている。



第33図　溝平面図・断面図（1）



第34図　溝平面図・断面図（２）

5　溝

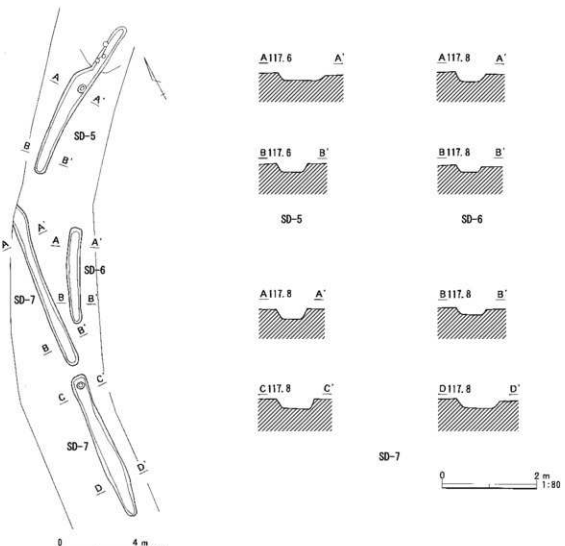
溝は22条を検出しているが、開削時期が判明するものはない。

1・2号溝は、B-3グリッドからK-5グリッドにかけて平行しながら蛇行する溝で、本調査以前に存在した旧道路に伴う溝である（第33図）。

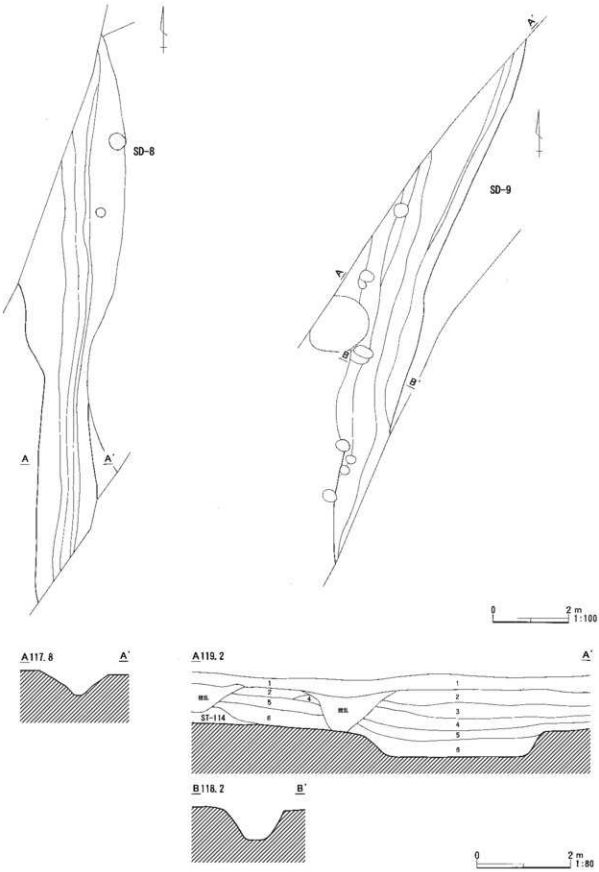
4号溝は、K-6からM-7グリッドにかけて検出された溝である（第34図）。調査区に対し、斜めに

4号溝土層説明

1	表　土	耕作土層
2	にぶい褐色土	Aｕ-A、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり強。
3	にぶい褐色土	Aｕ-A、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり弱。
4	暗褐色土	Aｕ-A、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり弱。
5	暗褐色土	Aｕ-A、褐色火山灰、ロームブロックを少量含む。粘性強。しまり弱。
6	暗褐色土	ロームブロック、黄灰色土ブロックを多量に含む。粘性強。しまり弱。
7	黒褐色土	ロームブロック、黄灰色土ブロックを少量含む。粘性強。しまり弱。
8	黒灰色土	鉄斑を多量に含み、ロームブロック、褐色火山灰ブロックを少量含む。粘性強。しまり強。
9	黒灰色土	ロームブロックを少量含む。



第35図　溝平面図・断面図（3）



第36図　溝平面図・断面図（4）

走行する溝で、断面は薬研状を呈する。覆土は第５層までＡｓ-Ａを含むが、第６層以下は堆積土の様相が異なる。天明期以降に再掘削が行われていることが考えられる。

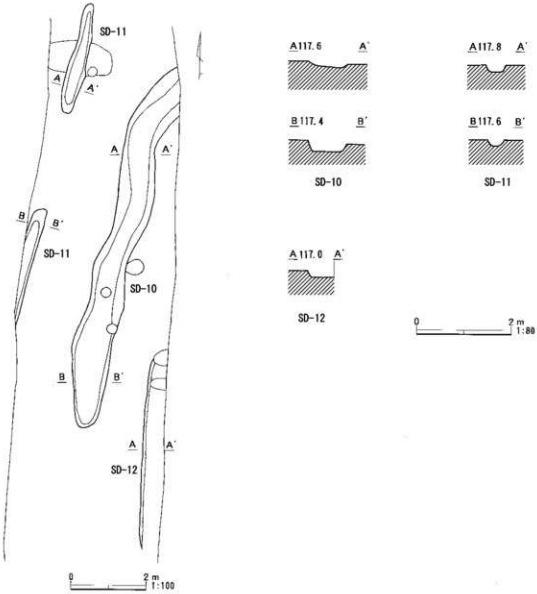
５・６・７号溝は、M-７からN－10グリッドにかけて確認された短い溝である（第35図）。このうち７号溝は、途中でいったん切れており、溝底に深浅の差が認められる。

８号溝は、N-11・12、0－11・12グリッドにおいて、ほぼ南北に走行し、161号墳の周堀と重複している（第36図）。４号溝と同様に、断面は薬研状を呈する。堀幅も相似ていることから、４・８号溝は一連の遺構であった可能性も考えられる。

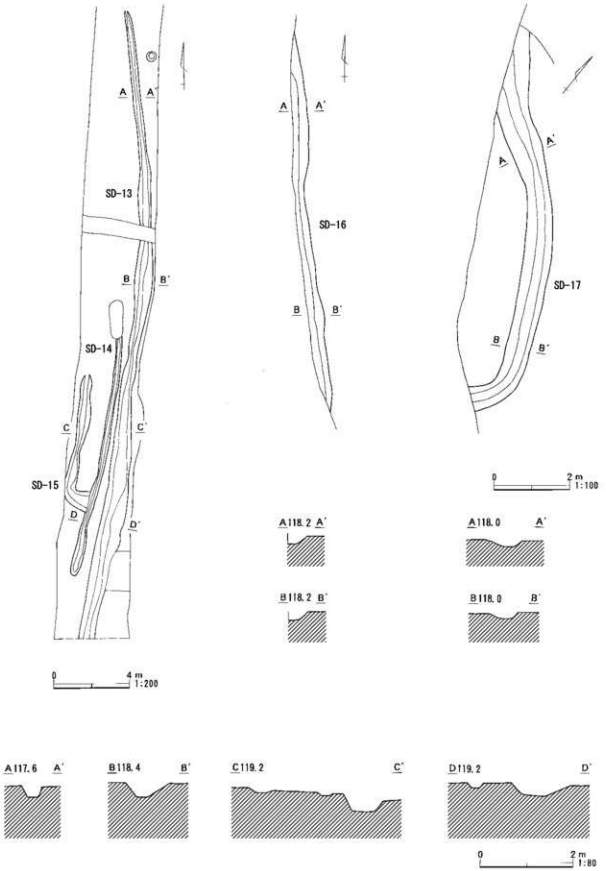
９号溝は、P-13・14グリッドにおいて検出され、114号墳の周堀と重複している（第36図）。断面は

９号溝土層説明

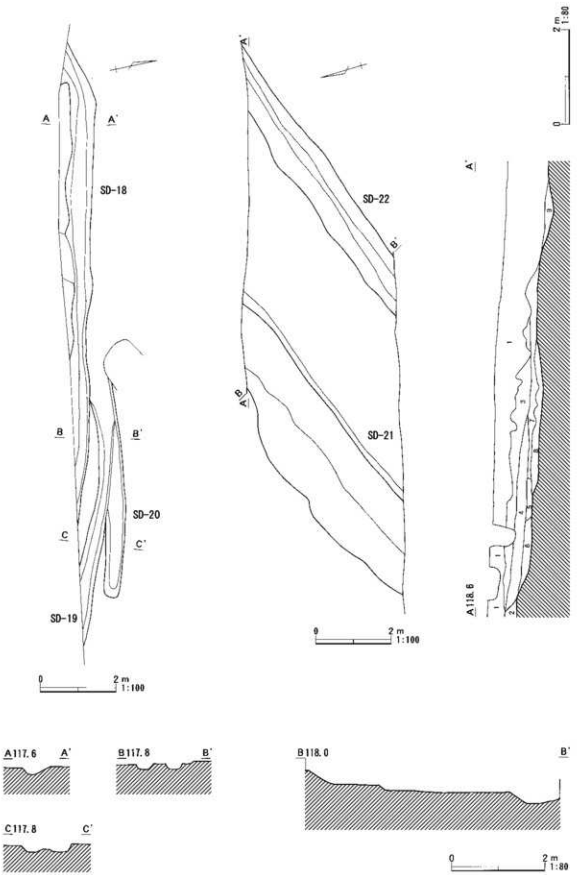
1　暗褐色土　現耕作土。As-Aを多量に含む。
2　暗褐色土　旧耕作土。
3　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。
4　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり強。
5　黒褐色土　粘性強。
6　黒褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまり強。



第37図　溝平面図・断面図（５）



第38図　溝平面図・断面図（6）



第39図　溝平面図・断面図（７）

21・22号溝土層説明

1	表　土		6	暗褐色土	ロームブロックを多量に含む。粘性なし。しまりなし。
2	にぶい褐色土	ロームブロックを少量含む。	7	暗褐色土	ロームブロック・白色粒子・粘質土ブロックを少量含む。粘性なし。しまりなし。
3	にぶい褐色土	ロームブロック、炭化物ブロックを少量含む。粘性なし。しまり強。	8	灰褐色土	鉄斑を多量に含み、ロームブロック、礫を少量含む。粘性なし。しまり強。
4	暗褐色土	ロームブロックを多量に含み、炭化物ブロックを少量含む。粘性なし。しまりなし。	9	灰褐色土	ロームブロックを少量含む。
5	暗褐色土	ロームブロックを少量含む。粘性なし。しまり強。			

箱形を呈し、第３層以下の覆土にはＡｓ-Ａの混入が認められない。

10・11・12号溝は、P-16、Q-16・17グリッドにおいて、まとまって検出された溝である（第37図）。このうち11号溝は、2.5mほど離れているが、走行および確認面からの深さが同様であることから一連の溝として認識される。12号溝は調査区の壁際に検出された浅い溝であるが、平行する11号溝とともに、旧道路の側溝であった可能性が考えられる。

13・14・15および16号溝はQ-20からQ-25グリッドにかけて確認されたほぼ南北に走行する溝である（第38図）。同じく旧道路の側溝であった可能性が考えられる。

17号溝はP-25・26グリッドにおいて検出された溝で、緩やかに弧を描くように走行している。至近に138号墳や162号墳が所在しているが、古墳の周堀としては不整形で、掘り込みも浅く、同種の遺構ではないであろう。

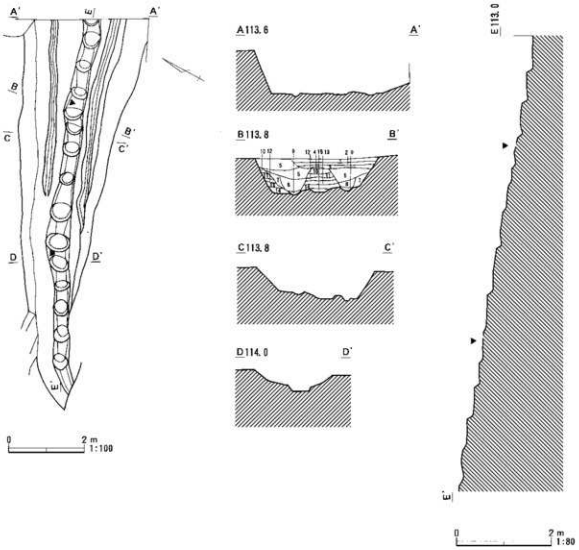
18・19・20号溝はN-26・27、O-26・27グリッドにおいて検出された溝で、138号墳と重複している（第39図）。これらの溝も、旧道路の側溝であった可能性が考えられる。

21・22号溝はL-26・27、M-26・27グリッドにおいて検出された溝である（第39図）。南側の立ち上がりが大きく削られているため判然としないが、２条の溝の走向が同一であることから、本来は１条の溝を複数次にわたって再掘削していることが想定される。

6　道路状遺構

調査区北東の端部で検出された遺構で、地山を切り通し状に深く開削して形成されており、道路跡と推定される（第40図）。調査区内で検出された長さ9.6mの範囲で、約1.6mの高低差があり、この間の傾斜角はおよそ10度である。底面には地山層を削り出し、階段状のステップが形成されている。

土層断面の観察から、この道路状遺構は、切り通し施工が行われたのち、繰り返し改修を加えながら使用され、その過程で当初の切り通しは、徐々に埋没していったことがわかる。そして、第10層まで堆積したところで、今度は中央部分を残して、左右２条の断面Ｖ字状の溝が開削されている。この溝の性格は不明であるが、中央部分に掘り残された元の道路状遺構に伴う排水側溝とは考え難い。２条の溝は開削後、比較的短期間の内に埋没したようで、溝内部の堆積土層については、細かな分層ができない。さらに２条の溝が埋没したのちは、ふたたび道路として機能したようで、溝の最上層である第６層を被覆するように、硬くしまる第２・３層が形成されている。この第２・３層と、その下の溝覆土である第６・７層にはAs-Aの混入が観察され、溝の埋没からその上層の路盤の形成は江戸時代天明期以降に下ることがわかる。



第40図　道路状遺構平面図・断面図

道路状遺構土層説明

1　黒 色 土　ロームブロックを多量に含む。粘性なし。しまりなし。
2　黒灰色土　As-Aを多量に含む。粘性弱。しまり強。
3　黒灰色土　As-Aを少量含む。粘性弱。しまり強。
4　As-Aの純層。
5　黒灰色土　As-Aを多量に含む。粘性弱。しまり弱。
6　黒灰色土　As-Aを少量含む。粘性弱。しまり弱。
7　黒灰色土　As-A、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり弱。
8　黒灰色土　ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり弱。
9　黒灰色土　鉄斑、ロームブロックを少量含む。粘性強。しまり弱。
10　黒灰色土　鉄斑を多く含み、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり強。
11　黒灰色土　鉄斑を少量含む。粘性弱。しまり強。
12　黒灰色土　鉄斑を多く含む。粘性弱。しまり強。
13　黒灰色土　鉄斑を多く含み、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり強。
14　黒灰色土　鉄斑を多く含み、ロームブロックを少量含む。粘性弱。しまり極めて強。
15　黒灰色土　粘質土ブロック粒子を多量に含む。粘性強。しまり強。

第Ⅳ章　結語

1　1・2号土坑出土遺物について

1・2号土坑出土遺物に関しては、現在所在不明であるため、すでに公表された拓影図、実測図（第31図1～12、埼玉考古学会　1986：図版77より転載）にもとづき、推定できる範囲で付言することにしたい。なお、上記シンポジウム掲載資料には、第31図1を「隆」（隆起線文）、2・3を「爪」（爪形文）、4を「刺」（刺突文）、8・9を「押」（押圧縄文）とする略号が付されている。

第31図1は、平行する縦の隆線が2本施されているようにも見えるが、隆起線文土器のそれとは異なるようである。拓影図、実測図でも、粘土紐を貼り付けた装飾ではなく、2つの稜のようなものであることが判る。2・3は、爪形文の施された土器である。2には、横位3、4列の「ハ」の字形爪形文、3には、横位2列の爪形文が施されている。4には、角張った工具を用いた刺突文が施されているようである。5は、爪形文と押圧縄文の併用された土器である。

6～9は、押圧縄文の施された土器であろう。6では、相接する2つの短い圧痕が間隔をあけ横位2列配され、破片上端には、撚りの異なる縄を用いた圧痕が見られる。7は、口縁部片であり、圧痕は、端部際まで及んでいる。9には、1段撚りR・Lの2条1組の圧痕が並走し、羽状をなすように施されている。破片上端には、横位の隆帯あるいは隆線が加えられ、その裾にも圧痕が見られる。

10には、2段撚りRLの縄文が回転施文されている。11には、条痕文らしき傾斜を違えた斜位の条線が施されているように見える。12にも、横位、斜位の条痕様の条線が見えるが、詳細は不明である。10～12は、2を除く他の破片に比べ、器厚が格段に厚いことが特徴的である。

以上、第31図1～12に示した1・2号土坑出土土器の内、1～9の土器については、縄文時代草創期の爪形文土器、刺突文土器、押圧縄文土器として間違いないと思われる。爪形文、押圧縄文などの特徴によるなら、埼玉県深谷市宮林遺跡第4号住居跡出土土器および同遺跡グリッド出土土器（宮井他　1985）に類例が見られる。10～12の土器に関しては、混入した他時期の土器である可能性があるようである。

2　長沖古墳群の構成

先にも述べたように、長沖古墳群は総数200基を超える埼玉県内最大規模の群集墳である。ここでは、本報告の成果を手がかりに、長沖古墳群が群集墳としてどのような特徴を有するのかという点に触れておきたい。

長沖古墳群では、これまでの調査で、遺構には伴わないものの、野焼きによる有黒斑の円筒埴輪片が少数出土していることから、群内に集成6期以前の古墳が存在することは確実である（菅谷ほか1980、菅谷1984）。また、集成7期にも、14号墳のような大型円墳が築造されているが、この段階までの古墳造営数は、まだ多くはない。集成8期に入ると、15・172・173号墳のような小型円墳も確認されるようになる。しかし、西五十子古墳群や東五十子古墳群のような、多数高密度の典型的な古式群集墳は形成されなかったと考えられる。

このようにしてみると、主体となるのは横穴式石室を埋葬施設とする中小型円墳であり、長沖古墳群が真に群集墳としての形成を見るのは、後期後半から終末期にかけてということになるであろう。すなわち、群集墳としての長沖古墳群は、集成10期後半、137号墳、79号墳（十兵衛塚古墳）、8号

墳、196号墳、25号墳などの前方後円墳や帆立貝形古墳などが出現するとともに、これを中心として周囲に中小の円墳が展開し、さらに前方後円墳の築造が停止したのちも、中小円墳の築造が継続し、結果として古式群集墳を含まない後・終末期型の群集墳として特徴づけることができる。

群内に所在する複数の後期前方後円墳は一地点に集中することなく分散している。また、明らかに突出した規模の前方後円墳も見られない。終末期においても大型の円墳や方墳は築造されていない。このことから、集成10期以降の長神古墳群は、複数の造墓主体によって形成された群集墳であり、この間の造墓主体相互の関係は、並立的なものであったと推定される。

内部に複数の小型前方後円墳を含む点は、古墳築造層の間に階層的な傾斜を内包していることを意味する。等質的な群構成を示すことが特徴とされる畿内の群集墳とは明らかに一線を画している。集成10期に造営の盛期を置く東日本の群集墳では、内部に中小の前方後円墳を含むことは珍しくなく、この点において、長神古墳群も典型的な東日本の群集墳であるといえる。

＜参考文献＞

大熊季広ほか　2004　『長神古墳群Ⅴ』児玉町文化財調査報告書第38集　児玉町教育委員会

大塚昌彦ほか　2017　『長神古墳群XII』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第50集　本庄市教育委員会

恋河内昭彦ほか　2015　『長神古墳群XV』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集　本庄市教育委員会

埼玉考古学会編　1986　「シンポジウム　縄文草創期－爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題」『埼玉考古』第24号　埼玉考古学会

坂本和俊　2008　「北関東（埼玉・群馬・栃木）の大型円墳の築造動向」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』第13回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会

塩野　博　2004　『埼玉の古墳』　さきたま出版会

菅谷浩之ほか　1980　『長神古墳群』児玉町文化財調査報告書第１集　児玉町教育委員会

菅谷浩之　1984　『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告古代第１集　児玉町教育委員会ほか

鈴木徳雄ほか　2011　『長神古墳群Ⅹ』本庄市遺跡調査会報告第41集　本庄市遺跡調査会

南毛古墳文化研究会　2001　『本庄市域における古式古墳調査の成果と課題』第５回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料

日高　慎　1994　「Ⅳ詳細調査の概要　２遺物の概要」『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』　埼玉県教育委員会

広瀬和雄　1992　「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』畿内編　山川出版社

増田逸朗・坂本和俊ほか　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』　埼玉県県史編さん室

増田一裕　1990　『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅳ－御堂坂２号墳の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第16集　本庄市教育委員会

松本　完　2002　『本庄遺跡群発掘調査報告書－御堂坂第１号墳の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第24集　本庄市教育委員会

的野善行　2014　『長神古墳群XII・女池遺跡Ⅳ・西富田新田遺跡Ⅱ』本庄市埋蔵文化財発掘調査報告書第36集　本庄市教育委員会

宮井英一ほか　1985　『大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

和田晴吾　1992　「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第五巻　近畿Ⅰ　角川書店

写　　真

113号墳［北から］

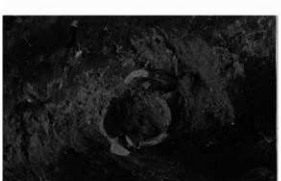
137号墳［西から］

137号墳［北西から］

137号墳［北西から］

137号墳円筒埴輪列出土状況［北西から］

137号墳円筒埴輪列出土状況［北から］



137号墳円筒埴輪（No.１）出土状況

137号墳円筒埴輪（No.２）出土状況

写真２

137号墳円筒埴輪（No.３）出土状況

137号墳円筒埴輪（No.４）出土状況

137号墳円筒埴輪（No.５）出土状況

137号墳円筒埴輪（No.６）出土状況

137号墳円筒埴輪（No.７）出土状況

161号墳・８号溝［北から］

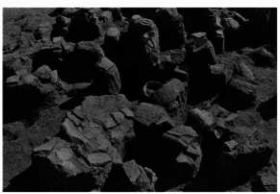
162号墳［南東から］

162号墳・22号溝［西から］

１号住居［北から］

１号住居炉出土状況

１号住居遺物出土状況



１号住居遺物出土状況

１号住居遺物出土状況

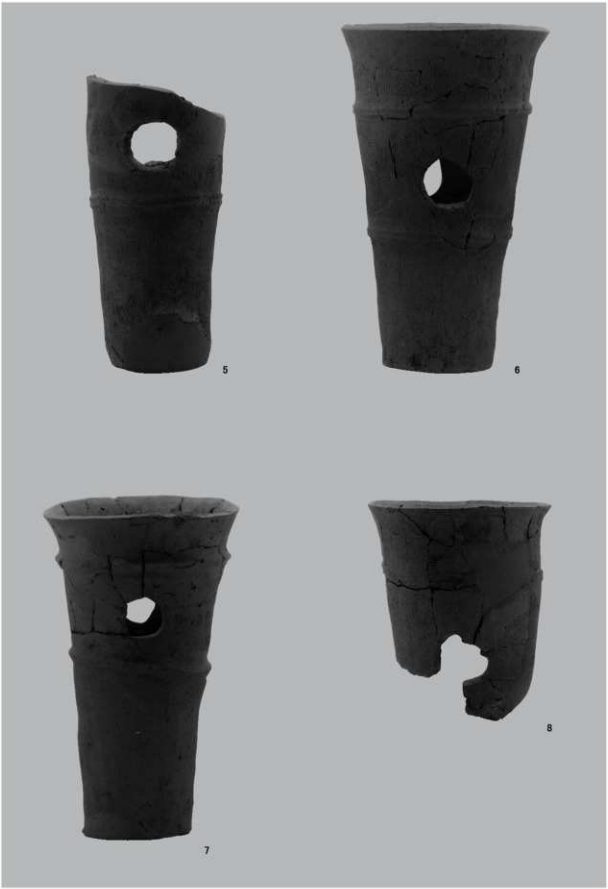
１・２号土坑・道路状遺構［北東から］

８・９号土坑・８号溝［南西から］

１・２号溝［北東から］

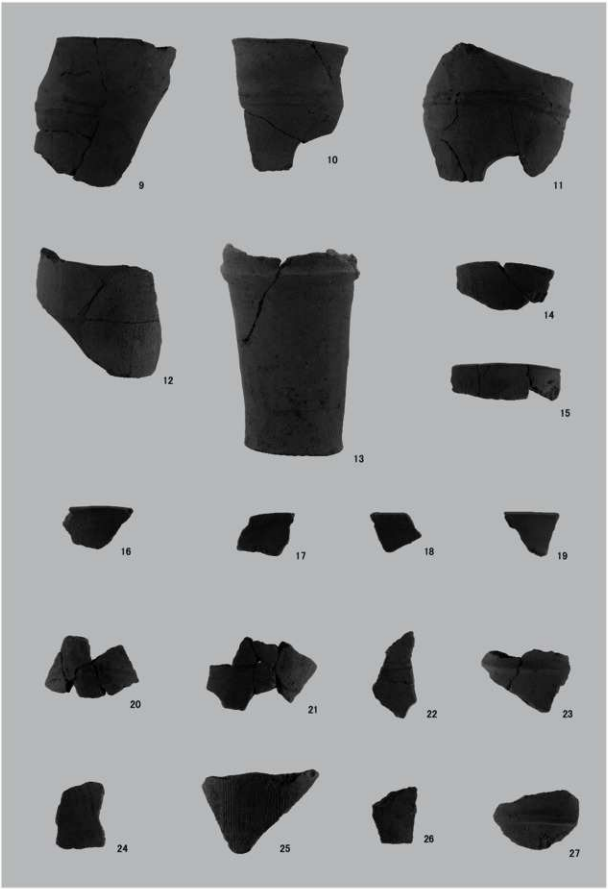
写真４

137号墳出土埴輪（１）

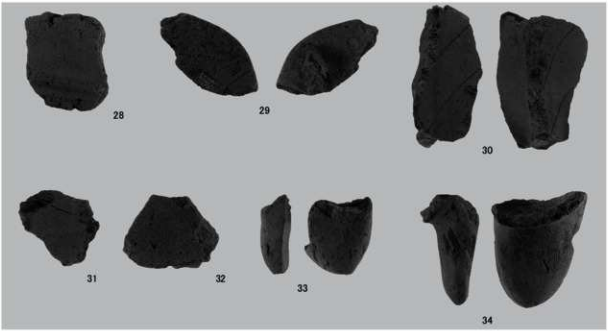


137号墳出土埴輪（２）

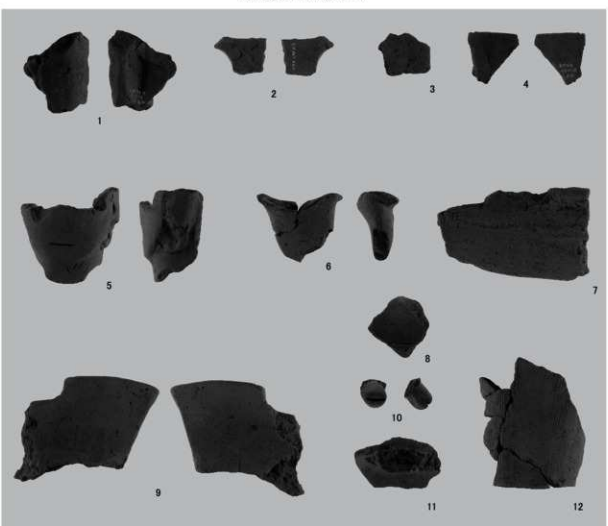
写真６



137号墳出土埴輪（３）



137号墳出土埴輪（４）



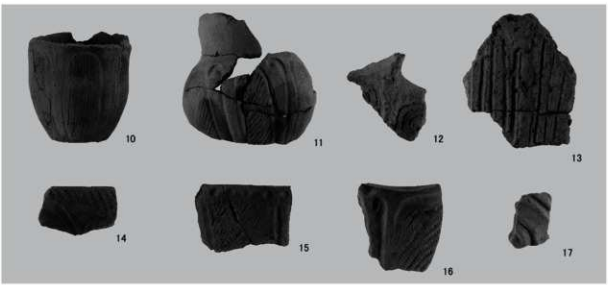
調査区出土埴輪

写真８

１号住居出土土器（１）

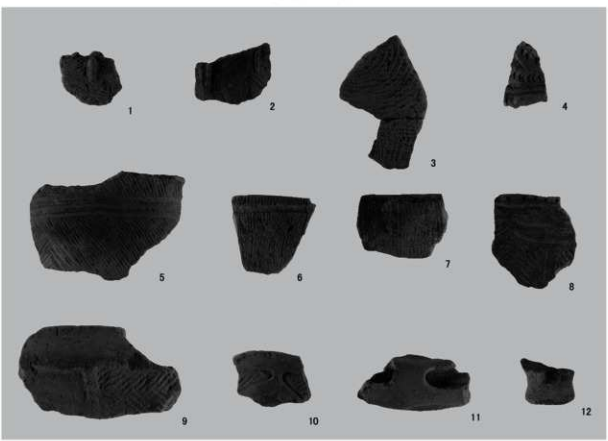
１号住居出土土器（２）

写真10



1号住居出土土器（3）

2号住居出土土器



調査区出土土器

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ナガオキコフングン								
書 名	長沖古墳群 XIII								
副 書 名									
シ リ ー ズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書							巻 次	第 51 集
編 著 者	太田博之								
編 集 機 関	本庄市教育委員会								
所 在 地	〒 367-8501　埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号　TEL. 0495-25-1185								
発 行 日	西暦 2017 年（平成 29 年）　3 月　31 日								
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地		コード 市町村	コード 遺跡	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積	調査原因
ナガオキコフングン 長沖古墳群	カンジウシゴダマチュウカトアザウノハラ 本庄市児玉町金屋字梅原		112119	54-300	36° 10′ 30″	139° 07′ 15″	19841020 ～ 19850131	1,750 ㎡	道路建設
	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物			特記事項
	古墳群	古墳時代	古墳 7 基、住居 2 棟ほか			埴輪、縄文土器ほか			

本庄市埋蔵文化財調査報告書　第51集

長　沖　古　墳　群　XVII

―梅原地区Ａ地点の調査―

平成29年３月27日　印刷

平成29年３月31日　発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号

電話　0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社